

有明教育芸術短期大学  
子ども教育実践研究  
第8巻

巻頭言……………有明教育芸術短期大学長 若林 彰

○論文

《研究論文》

保育実習指導の充実に向けて

—「事前事後指導（保育所）Ⅰ・Ⅱ」における学生の学びと評価に関する一考察—

……………角杉美恵子・新庄 恵子

保育者養成校で求められるピアノ演奏力の考察

—2歳児を対象としたリトミック指導—……………福田 久美

《その他》

地域貢献とeスポーツ……………伊庭 崇

《実践報告》

2024年度実践教育研究会実施報告書……………山田麻美子

2024年度「子どもたちとともに」活動報告……………伊藤菜々子

資料

子ども教育実践研究 編集要項

子ども教育実践研究 執筆・投稿要領

子育て事業における研究等に関する行動規範

2025年3月

有明教育芸術短期大学  
子ども教育実践総合センター

## 巻 頭 言

### 子ども教育実践研究紀要第8巻の発刊にあたって

有明教育芸術短期大学 学長 若林 彰

先般、本学において教育実践教育研究会が行われました。その中で講師の先生方が、「生まれ変わったら私はまた教師をやりたい」とおっしゃっていました。

私は、大変感銘を受けました。それを聞いていた学生たちは何を感じたでしょう。

この会は、子ども教育実践総合センターが主宰する会で、本学の地域にある小学校の校長先生や副校長先生、幼稚園、保育園の園長先生、副園長先生にお集まり頂き、学生たちに、保育現場、教育現場での様々なお話をしていただく会です。

昨今、マスコミでは教職について「仕事が大変だ、給料が安い、ブラックである。」等々、かなりネガティブに取り上げていると感じています。確かに保育現場、教育現場の先生方は大変な思いをして子供たちに立ち向かっている事は紛れもない事実です。でもそれをブラックという言葉一言で片付けてしまってよいのでしょうか。そんな報道を受け、教職を目指そうと思っていた若者たちが離脱していく姿を私は目にしています。

しかし、教職の仕事が最近になって厳しくなり、所謂ブラックになったわけではないと私は思っています。私たちが若い頃からも、「先生」の仕事は決してそんなに楽な仕事ではもちろんありませんでした。でも「先生」たちはみんな夢をもっています。それは、目の前で関わっている子供たちが立派に成長し、素敵な日本を創生してくれることです。この子供たちがこれからの素敵な日本を創り上げてくれるのです。そんな夢を胸に日々子供たちの指導に必死に取り組んでいる「先生」達、その姿を「教職はブラックだ、ブラックだ。」と連呼するマスコミの姿に私は違和感を感じます。

そんな思いを私がつもつ中、本学の多くの学生たちが集まってくれました。そしておいで頂いた先生方のお話を聞いて、将来教師に、保育士になることを学生達は夢見ていました。このような姿をマスコミの皆さんにぜひ取材してもらいたいと思います。仕事の大変なことだけを取り上げて、大変だ、大変だと言うのではなく、どんなやりがいがあり、どんな思いでその仕事に取り組もうとしているのか、そういうところを取り上げる必要があるのではないかと最近の加熱した教職ブラック報道に思う日々であります。

本年度も「子ども教育実践研究」が発刊されます。本誌第8号に掲載されている論考での様々な問題提起が、「教師のやりがい」として明日への教育実践のヒントや質向上の一助になることを期待しています。

多くの皆様のご感想やご意見を仰ぎ、本センターのさらなる充実に資して参りたいと思っております。どうぞ、忌憚のないご批評を頂ければ幸いです。

# 目 次

巻頭言……………有明教育芸術短期大学長 若林 彰

## ○論文

### 《研究論文》

保育実習指導の充実に向けて

—「事前事後指導（保育所）Ⅰ・Ⅱ」における学生の学びと評価に関する一考察—

……………角杉 美恵子・新庄 恵子 1

保育者養成校で求められるピアノ演奏力の考察

—2歳児を対象としたリトミック指導—……………福田 久美 15

### 《その他》

地域貢献とeスポーツ……………伊庭 崇 25

### 《実践報告》

2024年度実践教育研究会実施報告書……………山田麻美子 33

2024年度「子どもたちとともに」活動報告……………伊藤菜々子 39

## 資料

子ども教育実践研究 編集要項

子ども教育実践研究 執筆・投稿要領

子育て事業における研究等に関する行動規範

論 文

《研究論文》

# 保育実習指導の充実に向けて

## —「事前事後の指導（保育所）Ⅰ、Ⅱ」における学生の学びと評価に関する一考察—

角杉美恵子 新庄 恵子

### 要約：

乳幼児期の教育・保育の指導者を目指す学生にとって、保育現場での実習は資格や免許を取得するにも、進路を決定するにもとても重要な役割を果たしている。本研究では、事前事後の指導（保育所）Ⅰ、事前事後の指導（保育所）Ⅱの授業及び保育実習Ⅰ、保育実習Ⅱに関して、本学の学生に「保育実習を振り返って（以下、振り返り調査）」と自己評価を実施した。それらの結果から、授業におけるどのような学びが実習に生かされたか、実習に際して準備不足と感じたことは何か、実習の事前に学んでおく方が良いと感じたことはどのようなことかなどが明らかになった。さらに、学生は実習日誌の記録や指導計画、指導案の作成などに困難さを感じていることがわかった。

このことから、明確な目的や実践力をもって実習に臨むことができるよう、さらなる保育実習指導の充実を図る必要があることがわかった。そのために、事前事後の指導（保育所）Ⅰ・Ⅱの授業内容を見直し、改善を図っていく。

キーワード：保育実習、実習の振り返り、自己評価

### 1 はじめに

本学では、乳幼児期、学童期の保育士・教育者を養成することを目的としている。入学してくる学生は保育士資格、幼稚園教諭免許、小学校教諭免許の取得を目指している。

令和6年7、8月に本学キャリアサポートセンターが実施した令和元年度～令和5年度卒業生の就業状況に関する調査では、保育園が最も多く41%、次いで小学校が25%、幼稚園が10%となっている。その他、児童館・学童クラブ、児童発達支援施設や児童養護施設、一般企業等への就業者もいた。

この調査からもわかるように、学生の多くは入学当初の目的の達成を目指し、卒業後の進路を決定している。授業等で学んだ知識や技能を実際の保育現場で実践できるようにするために、また、進路の決定をするにあたっては保育実習は重要な役割を果たしていると言える。実習までの十分な準備や実習後の振り返りは、今後の保育職への適正や進路を考える上でも大切であると考えられる。

本学における保育士免許取得に関する実習では、2年次の2、3月に保育実習（保育所・施設）Ⅰ、3年次の8月に保育実習（保育所）Ⅱ及び施設実習Ⅲを行っている。実習に向けた事前事後の指導（保育所）Ⅰ〈事前指導12コマ、事後指導3コマ〉、事前事後の指導（保育所）Ⅱ〈事前指導12コマ、事後指導3コマ〉の授業において、実習終了後に保育実習の振り返りと自己評価を実施した。保育実習での学びを充実させるためには、これらの振り返りと評価を通して学生の抱える課題等を明

らかにし、事前事後の指導の授業の充実改善を図ることが必要であると考える。

## 2 研究の目的

保育の理論と実践について、保育に関わる科目や保育実習における学生の学びをより充実したものにするために、振り返り調査や自己評価から成果や課題、改善点等について明らかにし、事前事後の指導（保育所）Ⅰ、事前事後の指導（保育所）Ⅱの授業を改善することを目的とする。

## 3 研究の方法

2022年度 事前事後の指導（保育所）Ⅰ、2023年度 事前事後の指導（保育所）Ⅱを受講する学生を対象に保育実習後に振り返り調査及び自己評価を行った。これらの調査をもとに、課題や成果等について分析、考察する。

調査時期、調査対象及び対象数、調査内容については、以下のとおりである

### (1) 調査時期

2023（令和5）年5月

2023（令和5）年10月

### (2) 調査対象及び対象数

2022年度 事前事後の指導（保育所）Ⅰ 受講者 72名

2023年度 事前事後の指導（保育所）Ⅱ 受講者 44名

### (3) 調査内容・方法

保育実習（保育所）Ⅰ（以下、「保育実習Ⅰ」）、保育実習（保育所）Ⅱ（以下、「保育実習Ⅱ」）について、自己の振り返り及び自己評価を実施した。調査内容は、自己の振り返りについては、「Ⅰ 実習園に関する内容」、「Ⅱ 実習を通しての具体的振り返り」、「Ⅲ 日誌、部分実習、責任実習について」である。

自己評価については、4つの評価項目につき各4観点で、合計16の観点で評価を行った。また、「反省や感想」、「実習の課題」、「今後に生かしたいこと」については、自由記述とした。各調査については、保育実習Ⅰ、保育実習Ⅱの実習後に同様の内容で実施した。

### (4) 倫理的配慮

振り返り調査や自己評価にあたっては、調査対象の学生に対し、本調査の目的、個人名が第三者に特定されることがないこと、調査を成績評価に利用することはないこと、回収した用紙は個人情報保護の観点から保管し、データ活用後は適切に処分することなどを口頭で説明した。調査用紙の記入により、学生から参加協力の同意が得られた。

## 4 調査の結果と考察

### 4.1 保育実習Ⅰ・保育実習Ⅱの振り返りについて

実習では、授業で学んだことを実践してみるとともに、振り返りにより実習で得た経験をもとに自らの課題を明らかにすることが重要である。本学の事後指導における実習の振り返りでは、保育所側の評価と自己評価を比較するとともに、実習で「学んだこと」「気づいたこと」「考えさせられ

たこと」「感動したこと」などを記入する調査シート「振り返り調査」を実施した。また、振り返りのグループワークを行い、学びの確認や定着を図っている。本研究では、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの振り返り調査の質問項目を同じくし、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱでの課題を整理し比較検討することとした。

表1 「振り返り調査表」

Ⅰ 実習園に関する内容		
1 実習園の周囲の特徴や雰囲気		
2 実習園の様子		
3 実習担当者から学んだこと		
Ⅱ 実習を通しての具体的振り返り		
1 実習を通して得た「達成感ややりがい」について		
2 実習園での反省会や担当保育士から指摘されたり、指導を受けたりしたことについて		
3 次の質問に①から⑳から選び回答してください。		
(1) 授業で学んだことが実習で生かされたことは何ですか。		
(2) 実習に行く前に、準備不足だと自分自身で感じたことは何ですか。		
(3) 実習に行く前に、さらに学んでおきたかったことは何ですか。		
①手遊び	⑧障害児理解や対応	⑮言葉遣い、マナー
②ピアノ	⑨乳児対応（おむつ、寝かしつけ）	⑯大人との関わり
③歌	⑩日誌関係（漢字、言葉の使用）	⑰自然とのふれあい
④読み聞かせ	⑪指導案	⑱名札、持ち物
⑤制作、教材、シアター	⑫言葉のかけ方、関わり方	⑲頑張る気持ち
⑥戸外遊び	⑬ケンカ、トラブル対応	⑳その他
⑦発達段階の理解	⑭アレルギー対応	
Ⅲ 日誌、部分実習、責任実習について		
1 日誌の記入や提出について		
(1) 記入に費やした時間は一日何時間くらいでしたか。		
(2) 学んだこと、工夫したこと、困ったことについて記入してください。		
2 部分実習（責任実習）の指導案の作成について		
(1) 指導案作成に費やした時間は延べどのくらいでしたか。		
(2) 部分実習（責任実習）を実施して学んだことや考えたことはどのようなことですか。		

Ⅱ-3の①～⑳の内容について保育実習Ⅰと保育実習Ⅱを比較し、どのような学びが実習で生かされたのか、実習前に準備不足と感じたことや、学んでおきたかったことについて調査結果から以下のことがわかった。

## 4.2 保育実習Ⅰ・保育実習Ⅱの振り返りの調査結果および考察

### (1) 授業で学んだことが実習で生かされたこと

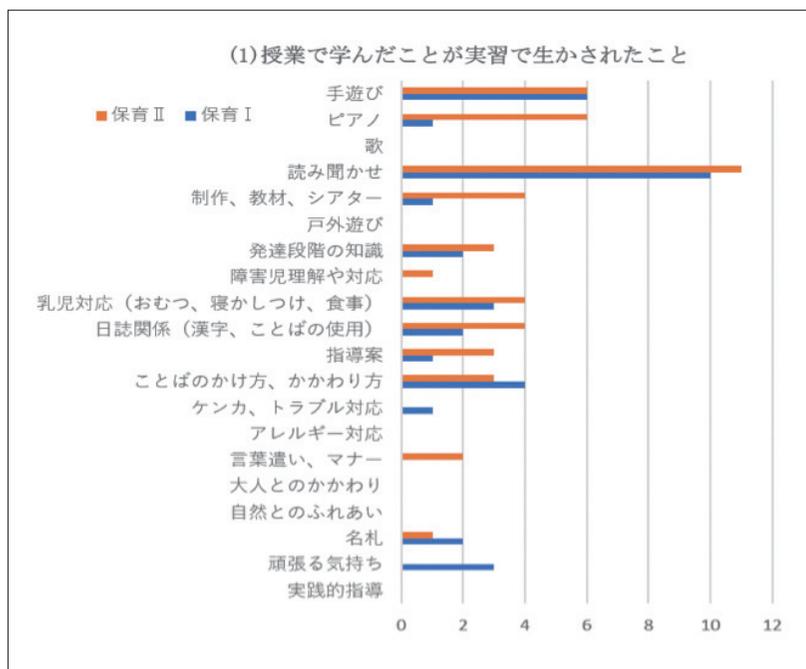


図 1

保育実習Ⅰ・Ⅱで「読み聞かせ」と「手遊び」の回答が多く、合間時間での短い対応について準備不足であったことが記されている。保育実習Ⅱの記述からは、保育実習Ⅰでの反省や課題を基に、授業での演習や模擬保育の経験を活かそうとしたことが記されており、授業での主体的な学びや事前の練習や準備などの必要性を実感し実習に臨んだ成果と考えられる。

### 自由記述から (1) 授業で学んだことが実習で生かされたこと

<p>&lt;保育実習Ⅰ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業で何度かやっていたおかげで、声のトーンやスピードを適切にすることができた。間の取り方や人や動物によって声色を変えること。</li> <li>・絵本、手遊びのバリエーションが多ければ多いほど楽になるし良かった。</li> <li>・乳児保育での「おもつ交換」や読み聞かせ、模擬保育等授業での模擬保育等で実際の演習が実習で役に立ったと実感している学生が多かった。</li> <li>・日誌を書かなければならないという考え方で実習をするより、子どもと積極的に関わり、頑張ろうという気持ちを大切にすることが実習をやるうえで大切だと思った。</li> <li>・ねらいや目的の書き方を事前に勉強していて実際に書く時に参考になった。</li> </ul>	<p>&lt;保育実習Ⅱ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・読み聞かせでは、声の大きさや声色、読みのペースなど授業でアドバイスをもらったので、改善して取り組むことができた。</li> <li>・絵本の読み聞かせの時間配分や読み終わった後の語りかけなどが参考になった。</li> <li>・授業で作ったスケッチブックシアターを部分実習で子どもたちにみせたら楽しそうに見てくれて良かった。</li> <li>・年齢にあった制作を行えた。・絵本を読みながら子どもの反応を見ることができた。</li> <li>・発達段階の知識は、子どもがどのような行動をすると危険であるなどが理解でき生かされた。</li> <li>・おもつ替えやミルクの授乳など、授業を思い出しながら行うことができた。</li> <li>・授業で作成した指導案を参考にできた。</li> </ul>
--	--

(2) 準備不足だと自分自身で感じたこと

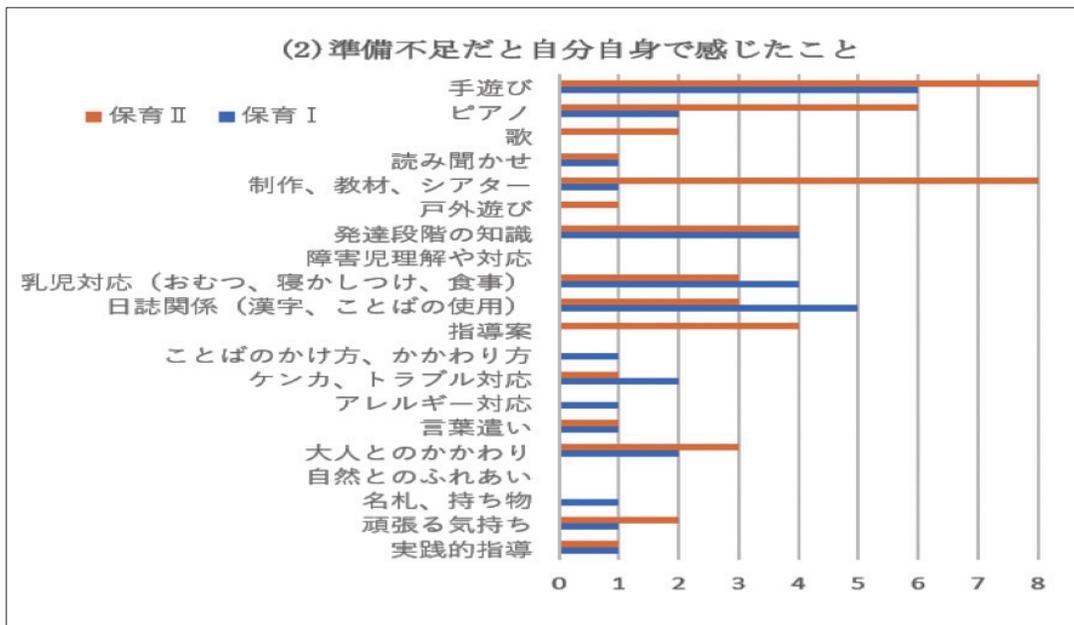


図2

自由記述から (2) 準備不足だと自分自身で感じたこと

<p>&lt;保育実習Ⅰ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・手遊びだけでなく童謡や童歌も準備することが大切だと思った。手遊びのレパートリーが少なかった。</li> <li>・学校では食事の時に実際に立ち会って学ぶことができなかったのも、初めての食事介助が難しかった。</li> <li>・子どもの様子や気づきあまり書けなくて漢字や言葉使いが十分ではなく勉強不足だと感じた。</li> <li>・気をつけていたが、誤字脱字が多くもっと自ら学んでおくと良かったと思う。</li> <li>・緊張が勝ってど忘れしてしまったことがあり、人前で何かをすることを習慣にしなければと感じた。</li> <li>・年齢による発達は理解していたものの、月齢による発達は理解しきれていなかった。</li> </ul>	<p>&lt;保育実習Ⅱ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・手遊びを単に覚えるのではなく、年齢別に覚えておけば良かった。</li> <li>・発達段階についてもっと理解していれば、子どもの気持ちにもっと寄り添った保育ができたと思った。</li> <li>・活動内容が少なく短時間で終わってしまった。</li> <li>・制作は事前に時間のある時に作っておけば良かった。</li> <li>・2歳児クラスの担当で、おもむつ替えや排せつ、食事の援助などもっとスムーズに行いたかった。</li> <li>・授乳、調乳やおむつ替えを実際にすると難しいと感じることが多く、準備不足だった。</li> <li>・季節の歌を知っていたら朝の会、帰りの会で大きな声で一緒に歌えたと思った。</li> </ul>
---	--

保育実習Ⅰは、「手遊び」「日誌関係」「発達段階の知識」「乳児対応」の順に多かった。保育実習Ⅱでは、「手遊び」「制作、教材、シアター」が最も多く、次いで「ピアノ」「発達段階の知識」「指導案」であった。保育実習Ⅰの反省を踏まえ練習したが、保育実習Ⅱでの責任実習、制作やピアノ

など発達段階に応じた具体的知識や技能が準備不足だったことがうかがえる。実際にやってみるとうまくできないことを実感したようである。日誌や指導案についても保育実習Ⅰ・Ⅱともに準備不足について記述している。

(3) 実習前に学んでおきたかったこと

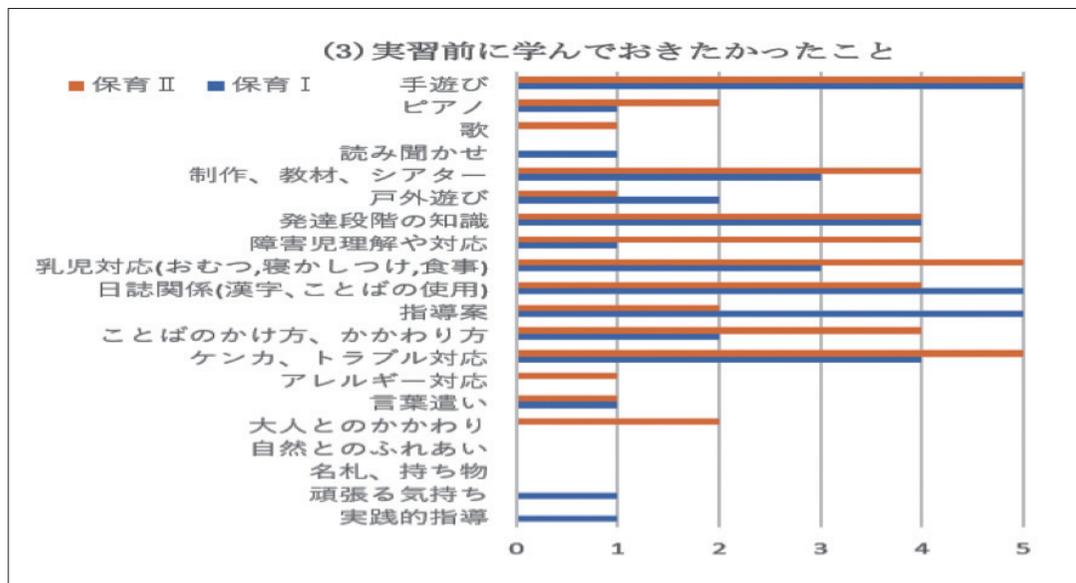


図3

自由記述から (3) 実習前に学んでおきたかったこと

＜保育実習Ⅰ＞	＜保育実習Ⅱ＞
<ul style="list-style-type: none"> <li>・年齢に応じた声かけや、促しの際の声かけの工夫を学び、もう一度注意して接したい。</li> <li>・発達障害のある子どもとの関りが難しかったので、理解を深めて、適した援助をできるようにしたい。</li> <li>・発達段階についてもっと理解しておけばより良い関りができたと思う。</li> <li>・多くの子どもがおむつをつけていて替え方が分からなかった。寝かしつけでもなかなか寝ない子の対応が難しかったので事前に学んでおけば良かったと思った。</li> <li>・自分の目でトラブルの様子を見ていなかった時の対応に戸惑った。</li> <li>・子ども同士でやり取りをする中で、「仲立ち」することの難しさを感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちへの声掛けが少ないと評価されたため、学びが足りず行動することができなかったと感じた。</li> <li>・ケンカやトラブルの際、言葉のかけ方や対応の仕方を学んでおけばよかった。</li> <li>・授業で人形を通して練習をしたが、実際の乳児対応では、あべれたりイヤイヤ期だと受け入れてくれない子どもがいて対応が難しかった。もう少し勉強しておくべきだった。</li> <li>・特別な配慮の必要な子どもへの対応は、授業では学んだが実際の対応は難しいと感じた。</li> <li>・指導案は授業で友だちと共有して一緒に書いた方が学びが深かったと感じた。</li> <li>・おむつ替えや食事補助など、もっと知りたかった。</li> </ul>

ほとんどの項目について学んでおきたかったと回答している。「手遊び」「読み聞かせ」「制作」については複数の授業で実践的な学修を行っており、模擬保育の際にも先生役を行っているが、実習に臨んだ際には学びが不十分と感じている傾向が見られた。また、「乳幼児対応」「発達段階の指導」「ケンカ、トラブルの対応」は、実際にかかわることで多くの気づきを実感し保育実習Ⅰ・Ⅱともに事前の学びが必要と回答している。日誌や指導案については保育実習Ⅰでの経験を活かし、保育実習Ⅱに向けて準備をして臨んだことで改善され、自らの課題ととらえ今後に生かそうとする記述もみられた。

#### 4.3 学生の自己評価について

自己評価は、本学で使用している保育実習の評価表を用いて、4つの評価項目と16の評価の観点ごとに5点法で、5点を一番高い得点として実施した。

また、「反省や感想」、「実習の課題」、「今後に生かしたいこと」の3点については自由記述式で行った。本調査は、保育実習Ⅰ（2年次）、保育実習Ⅱ（3年次）の実習終了後に実施した。保育実習Ⅰ・保育実習Ⅱの自己評価の評価項目および、評価の観点別の評価の平均を比較し、学生がどのようなことに対し成果、課題と感じているのかを明らかにする。調査内容については、表2のとおりである。

表2 自己評価の内容

<p><b>1 基本的な実習態度</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>①礼儀、服装、言葉遣い、挨拶などの基本的態度（以下、「礼儀、服装等」）</li><li>②出勤状況、提出物の期限、指示された事項の遵守（以下、「出勤状況、提出期限」）</li><li>③実習施設の保育の特性に沿った行動（以下、「保育特性に沿った行動」）</li><li>④各自の掲げた実習の目的の達成（以下、「目的達成」）</li></ul> <p><b>2 子ども理解・子どもへのかかわり</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>①子どもの個別的な発達の理解（以下、「発達の理解」）</li><li>②子どもの遊びや活動へのかかわり（以下、「遊び・活動へのかかわり」）</li><li>③子どもを安心させる養護的なかかわり（以下、「養護的なかかわり」）</li><li>④子どもの健康を維持する養護的なかかわり（以下、「健康維持のかかわり」）</li></ul> <p><b>3 保育の記録と指導計画</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>①誤字脱字のないわかりやすい記述（以下、「わかりやすい記述」）</li><li>②子どもの発達の理解、保育の意図の理解に基づいた具体的な記録（以下、「具体的な記録」）</li><li>③子どもの実態に沿った指導計画の作成（以下、「指導計画」）</li><li>④記録・指導案における反省、指導における改善（以下、「反省・改善」）</li></ul> <p><b>4 保育に関する研究態度</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>①着眼点、課題意識をもった実習への取組（以下、「課題意識」）</li><li>②保育士の役割の理解と積極的な保育実践（以下、「積極的な保育実践」）</li><li>③子どもの遊びや活動、保育環境や教材への興味と研究意欲（以下、「研究意欲」）</li><li>④指導や助言に基づく保育実践の改善（以下、「保育実践の改善」）</li></ul>
---

#### 4.4 自己評価の調査結果および考察

評価項目別の平均値を保育実習Ⅰと保育実習Ⅱで比較すると図4のようになった。「1 基本的実習態度」は同じ平均値であるが、その他の3つの評価項目すべてにおいて、保育実習Ⅱが保育実習Ⅰより高くなっている。評価項目の中では、「1 基本的実習態度」の評価が一番高く3.65、次いで、「4 保育に関する研究態度」、「2 子ども理解・子どもへのかかわり」、「3 保育の記録と指導計画」となっている。

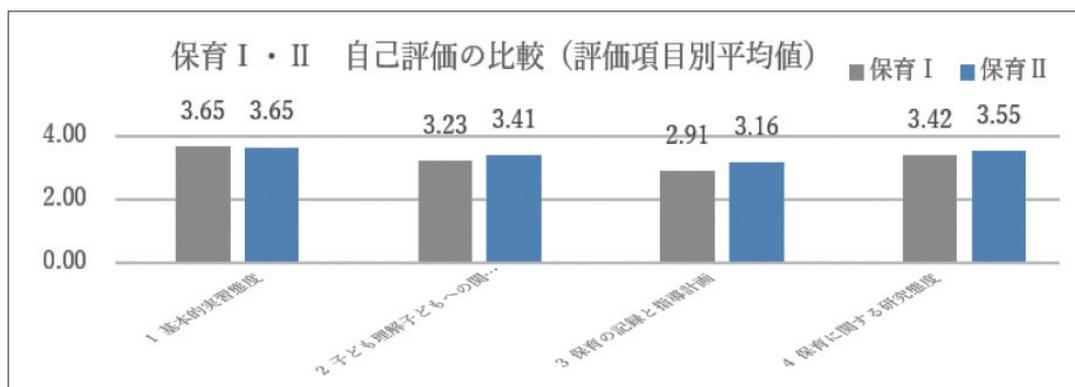


図4 自己評価の比較 (評価項目別平均値)

「基本的な実習態度」の項目が高い評価だったのは、実習に臨む目的が明確で、実習を受け入れてもらっているという意識から自ら進んで挨拶をしたり、礼儀正しく丁寧な言葉遣いなどに気を付たりするというを学生自身が十分理解して実習を行っていたためであると考えられる。実習後、園側からも「挨拶、言葉遣いなどの社会人としてのマナーに十分気を付け、保育者や子どもと接することができていた。」「質問や挨拶など、常に相手に敬意をもって会話していた。」などの感想をいただいた。しかし、学生の自由記述では、「実習日誌や指導案の提出期限を守れなかったこと」や、「自分の実習の目的の達成が十分でなかった」などの意見が見られた。また、体調不良からの欠席や遅刻なども少数ではあるが見られた。体調管理や提出物の期限厳守などは実習以外の学生生活の多くの場面で日常的に意識しなければいけないことである。

「保育の記録と指導計画」の項目が低い評価だった。特に保育実習Ⅰでは、2.91の評価であった。実習日誌については、「具体的に何を書いていいかわからない。」「誤字脱字が多い。」「提出しても修正部分が多く、何度も直されてしまった。」「多くの時間を要してしまう。」などの反省が学生から聞かれる。授業では、実習日誌の記述の仕方や、指導計画の作成方法等について学ぶ機会があるが、自己評価の結果からは、授業だけでは不十分であったことが推測される。

また、実習日誌や指導案については、手書きかコンピュータを活用した作成のどちらかを学生が選択できるようにしている。コンピュータで作成できる様式等を提示し、作成に負担がかからないような工夫をしているが、手書きで作成している学生の方が多い状況である。実習日誌の書き方や、指導計画、指導案の作成については、学生個々の状況に即したさらなる指導が必要であると思われる。

次に、4つの評価項目の16の観点別についての平均値を見ていく。保育実習Ⅰと保育実習Ⅱを比較したものは表3、グラフでは、図5のような結果になった。

学生の自己評価の平均値の結果から、どのような観点について高い評価をしているのか、また、どのような観点について低い評価をしているのかを考察していく。それぞれ具体的な内容を知ることにより、今後の授業設計や指導の工夫につなげていきたい。

表3 自己評価の平均（観点別平均値）

	評価の観点	平均値	
		保育実習 I	保育実習 II
1 - ①	礼儀、服装等	3.81	4.00
②	出勤状況、提出期限	4.03	3.80
③	保育特性に沿った行動	3.35	3.35
④	目的達成	3.42	3.45
2 - ①	発達の理解	3.19	3.30
②	遊び・活動へのかかわり	3.65	3.85
③	養護的にかかわり	3.13	3.30
④	健康維持のかかわり	2.94	3.18
3 - ①	わかりやすい記述	2.87	3.03
②	具体的な記録	2.97	3.13
③	指導計画	2.66	3.13
④	反省・改善	3.13	3.38
4 - ①	課題意識	3.23	3.38
②	積極的な保育実践	3.52	3.65
③	研究意欲	3.32	3.43
④	保育実践の改善	3.61	3.75

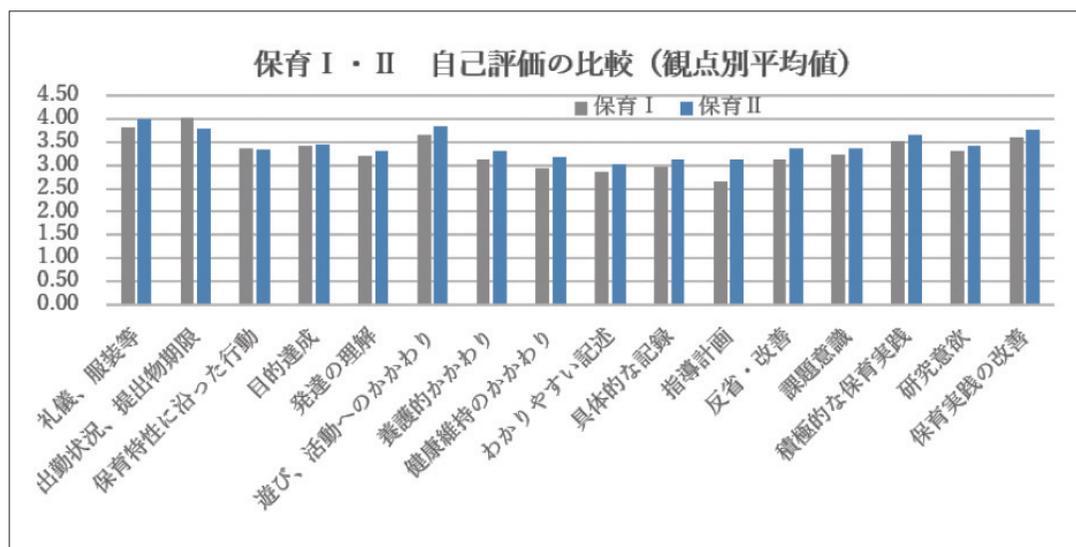


図5 自己評価の比較（観点別平均値）

16の観点別平均値において、特に平均値の高い観点と低い観点を5位まで挙げると表4、表5のとおりである。評価の高い観点については、学生がある程度自分の目標が達成できたと考えている観点であると思われる。しかし、評価の低い観点については、実習までの学びや、実際の保育現場での実践が不十分であったものとする。

表4 平均値の高い観点

順位	保育実習Ⅰ	保育実習Ⅱ
1	出勤状況、提出期限	礼儀、服装
2	礼儀、服装等	遊び・活動へのかかわり
3	遊び・活動へのかかわり	出勤状況、提出期限
4	保育実践の改善	保育実践の改善
5	積極的な保育実践	積極的な保育実践

表5 平均値の低い観点

順位	保育実習Ⅰ	保育実習Ⅱ
1	指導計画	わかりやすい記述
2	わかりやすい記述	具体的な記録/指導計画
3	健康維持のかかわり	
4	具体的な記録	健康維持のかかわり
5	養護的かかわり/反省・改善	発達の理解/養護的かかわり

評価の高い観点を順にあげると、保育実習Ⅰでは、1位が「出勤状況、提出期限」、2位が「礼儀、服装等」、3位が「遊び、活動へのかかわり」、4位が「保育実践の改善」、5位が「積極的な保育実践」となっている。

保育実習Ⅱでは、1位が「礼儀、服装等」、2位が「遊び、活動へのかかわり」、3位が「出勤状況、提出物期限」、4位、5位は保育実習Ⅰと同様に「保育実践の改善」、「積極的な保育実践」であった。16の観点の内、評価の高い5つの観点は保育実習Ⅰと保育実習Ⅱで順位は異なるが、同様のものとなった。このことから、学生の理解が実践につながり、学生自身もおおよそ達成できた実感しているのではないと思われる。しかし、出勤状況や提出期限、礼儀や服装については、保育者としてはもとより、社会人として働く上で当然備えておくべき基本的な事項であるため、より高い自己評価になってもよいのではと考える。

評価の低い観点を見ると、保育実習Ⅰでは、1位が「指導計画」、2位が「わかりやすい記述」、3位が「健康維持のかかわり」、4位が「具体的な記録」、5位が「養護的かかわり」、「反省・改善」とである。1位から4位までの全てが評価3.00を下回っている。保育実習Ⅱでは、1位が「わかりやすい記述」、2位が「具体的な記録」、「指導計画」、4位が「健康維持のかかわり」、5位が、「発達の理解」、「養護的かかわり」となっている。指導計画の作成や具体的な記録の取り方等については、学生がさらに自信をもって実習中に取り組めるよう、授業内で取り扱う回数や、指導方法について更なる改善が必要であるとする。

保育所保育指針解説（平成30年 厚生労働省）では、次のように、平成29年告示の保育所保育指

針の改定の要点を解説している。

「養護は保育所保育の基盤であり、保育所保育指針全体にとって重要なものであることから、『養護に関する基本的事項』を総則において記載することとした。」

また、保育所保育指針(平成29年告示 厚生労働省)の第1章 第2の養護に関する基本的事項の(1)養護の理念では、次のように示されている。

「保育における養護とは、子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わりであり、保育所における保育は、養護及び教育を一体的に行うことをその特性とするものである。保育所における保育全体を通じて養護に関するねらい及び内容を踏まえた保育が展開されなければならない。」

このことから、養護的なかかわりの重要性について授業等を通して学生の理解を深め、保育実習においても高い意識をもって取り組む必要があると考える。

また、健康及び安全についても具体的な提示をして新たに記載されるとともに、内容の充実が図られていて、健康および安全についても十分な指導が必要であると考ええる。

#### 4.5 授業内容の改善について

授業の振り返りと自己評価の結果から見えた課題等を踏まえ、今後の授業内容の充実に向け、検討、改善を図ることが必要である。

表6 「事前事後の指導（保育所・施設）I」の授業内容

回数	授業内容
第1回	保育実習Iの目的 保育所実習・施設実習の目的、意義、内容を理解する
第2回	保育所実習での実習実践方法 1 3歳未満児の生活と保育
第3回	保育所実習での実習実践方法 2 3歳以上の幼児の生活と保育
第4回	保育所実習の日誌と研究目的 1 日誌の記述の仕方
第5回	保育所実習の日誌と研究目的 2 実習生の研究目的・着眼点
第6回	施設実習の意義を理解する 児童福祉施設の社会的役割について
第7回	施設実習での実習実践方法 社会福祉施設の種類の種類 利用者との関わり方と援助方法
第8回	施設実習の日誌と研究目的 日誌の記述の仕方・実習生の研究目的・着眼点
第9回	保育実習の指導案の理解と作成 1 保育所における部分・責任指導案の作成方法
第10回	保育実習の指導案の理解と作成 2 施設における部分・責任指導案の作成方法
第11回	保育実習の指導案の実践 1 保育所実習における指導案にもとづくロールプレイとディスカッション

第12回	保育実習の指導案の実践 2 施設実習における指導案にもとづくロールプレイとディスカッション
第13回	実習後の振り返り 実習後の成果と課題を省察して自己評価を行い、レポートを作成する。
第14回	実習成果の課題の発表 1 保育所実習における成果の発表とディスカッション
第15回	まとめ 実習の成果と課題の発表 2 施設実習における成果の発表とディスカッション

表7 「事前事後の指導（保育所）Ⅱ」の授業内容

回数	授業内容
第1回	ガイダンス(保育実習Ⅱの目的および実施上の規則の確認)
第2回	保育所の社会的責任と役割について
第3回	養護と教育が一体的に行われる保育とは？
第4回	観察に基づく保育の理解と記録(子どもの活動・個人差・年齢差)
第5回	観察に基づく保育の理解と記録(保育士などの動きや保育実践)
第6回	環境を通して行う保育、総合的な保育の理解
第7回	保育実践における遊びの在り方について考える 指導案の作成と模擬保育準備
第8回	担任業務や主活動について考える（構想計画書作成） 指導案作成と模擬保育準備
第9回	部分実習、責任実習についてプレゼンテーション 模擬保育とリフレクション活動
第10回	模擬保育とリフレクション活動
第11回	模擬保育とリフレクション活動
第12回	模擬保育とリフレクション活動
第13回	実習を振り返り、成果と課題を確認する。(事後指導)
第14回	実習の成果と課題をグループワークで共有する(事後指導)
第15回	まとめ (グループ発表)(事後指導)

表6、表7は事前事後の指導（保育所）Ⅰ、Ⅱの2024年度のシラバスである。2024年度の事前事後の指導（保育所）Ⅰでは、次の5点を到達目標としている。（施設を除く）

- ①保育所の社会的役割と職務内容の理解
- ②乳幼児の発達に即した具体的な保育技術を知る。
- ③実習日誌記入の具体的内容の理解
- ④部分指導計画の考案・作成
- ⑤実習前に設定した目標の実習後の省察、新たな学習課題を明確にする。

特に、実習日誌の記入、記録の仕方、部分実習・責任実習の指導計画作成に関して、複数回取り扱い、配布資料等を準備し学生が具体的に学べるようにしている。しかし、自己評価の結果は低い評価であったため、更なる工夫改善が必要である。事前事後の指導（保育所）Ⅱでは、これまで修得した実習や科目との関連性を踏まえながら、より良い保育実践力の修得を目指し、次の3点の到達目標を設定している。

- ①乳幼児の個々の発達に対応し、子どもの状況に即した保育技術を習得する。
- ②保育実習Ⅰで学んだ実習日誌の目的や意義を再確認し、具体的な記入方法を学ぶ。
- ③指導計画作成、模擬保育を体験し、明確な目的や実践力をもって実習に臨む。

これらの到達目標に即した指導をしているが、保育実習を行ってみると学生自身が授業では分からなかった課題に気づき、新たな困難さを実感していることがわかった。一方、保育実習が充実し、実習を通した学びが深まり保育者になりたいという思いを強くして戻ってくる学生も一定数いることが事後報告や自由記述などからわかった。

保育実習Ⅰでの学びを保育実習Ⅱで深めたり、自分の課題を改善できるようにするために、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱのつながりを学生自身が考える場を授業内に設定することも大切であると考え

る。事前事後の指導（保育所）Ⅱの第1回の授業で、各自の保育実習Ⅰを振り返り、グループ討議や発表を行っているが、これらは自己の課題の明確化と新たな目標の設定に効果的であった。そのため、次年度も同様の機会を設定していく。

実習の振り返り調査からは、授業での演習や模擬保育等の学修が実習の際に役立ったとの記述が多く見られた。このことは、事前事後の指導（保育所）Ⅰ、Ⅱの授業のみならず、筆者が担当する「体育Ⅰ運動」、「子どもと健康」の授業において、指導案の作成、マイクロ模擬保育を実施するとともに、グループワークでの自己評価や他己評価での経験が保育実習に際して効果的であったのではないかと考える。事前事後の指導（保育所）Ⅱでは、第9回～第12回の授業で模擬保育を実施しているが、事前事後の指導（保育所）Ⅰにおいては授業回が限られているため、模擬保育の時間の確保が難しい状況である。そのため、保育士をゲストティーチャーとして招聘し保育現場と結びつけることや、定められた実習以外での保育体験等も、充実させていくことが大切であると考え。2024年度夏季休業中には学内の実習委員会や子ども教育実践総合センターと連携し、保育所でのボランティア活動を実施したが、今後、学生への周知等を工夫しより多くの学生が保育現場での体験をすることを促していく。

これらの取り組みを通して、具体的な保育のイメージがもてるようにするとともに保育士という職業への理解が深まると考える。

実習日誌の記述の仕方については、事前事後の指導（保育所）Ⅰで、実際に作成し学生間での添削や検討をするなど指導を行っているが、先輩学生の実習日誌を書き方の手本として見て学ぶことも有効である。

日誌の記録の方法や指導案の作成は、ICTの活用等多様な方法を用いている保育所が近年増加し

ている傾向にある。本学の保育実習においても記入欄の縮小やコンピュータ入力を推進するなど改善を図り、実習日誌や指導案の作成に対する学生の負担感を軽減してきたが、今後も更なる工夫が必要である。

誤字・脱字の指導や子どもの動きを見る視点や気づき、環境構成の意味、養護と教育を踏まえた保育者の言動、意図や保育のねらいなど、学生が何を見て、何を学んだら良いかということを押さえた指導も大切であると考ええる。

手遊び、読み聞かせ、制作については、複数の教科で専門的な学修を進めているが、更に各授業担当者との連携を深め学生自らレポーターを増やし、実践力を高められるようにしていく必要がある。

## 5 おわりに

本研究を通して、保育実習の振り返り調査や自己評価から成果や課題、今後の授業の改善等が明らかになった。保育所保育指針では、「保育内容等の評価」の「保育士の自己評価」について次のように示されている。

「自己評価における自らの保育実践の振り返りや職員相互の話し合い等を通じて、専門性の向上及び保育の質の向上のための課題を明確にするとともに、保育所全体の保育の内容に関する認識を深めること。」

保育者として自己評価を通じて保育の質の向上に努めなければならないことであり、保育実践の振り返りや自己評価の意義とその重要性について、学生の理解を深める指導も重要であると考ええる。また、現在、当該授業以外で実施している実習報告会については、1～3年次の学生がグループに分かれ、代表の学生が保育園、幼稚園、施設、小学校の実習での学び等を発表し、これから実習を行う後輩たちの質問に答え、グループディスカッションを行う形式をとっている。今後、保育実習について授業内で3年次の学生から1、2年次への具体的なアドバイスができる機会を設定することが必要であると考ええる。実習経験者の先輩学生から意見や感想を聞くことは、これから実習に行く学生にとって不安の解消や励みになり保育実習の充実につながるものと考ええる。

本研究で明らかになった課題を今後のシラバス作成に生かすとともに、授業内容の改善に努め、学生が自信をもって保育実習に臨めるよう授業のさらなる充実を図っていく。

### 【引用・参考文献】

- ・厚生労働省（2003）指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について（2018 一部改正）
- ・厚生労働省（2017）保育所保育指針
- ・厚生労働省（2018）保育所保育指針解説
- ・有明教育芸術短期大学キャリアサポートセンター（2024）令和6年度実施卒業生の就業状況に関するアンケート《卒業生》

# 保育者養成校で求められるピアノ演奏力の考察

## —2歳児を対象としたリトミック指導—

福田 久美

### 要約：

社会状況の変化に伴い、かつては未就園児といわれた0-2歳児の保育・教育の需要は、近年ますます高まる傾向にある。これまでの保育者養成校のピアノ演奏指導研究は、伴奏法や弾き歌いが中心であったが、今回は乳幼児の音楽教育をより充実させる方法として、保育現場での需要の高いリトミック指導におけるピアノ演奏法を取り上げる。J.ダルクローズのメソッドに則った2歳児のリトミック・レッスンを例に、リトミック指導におけるピアノ演奏法について考察した結果、「ブラインド・タッチ」「コード・アレンジ力」「豊かな感性と表現力」が求められることが示された。

## I はじめに

東京都では、現在0-2歳までの第2子は保育料が無償化されているが、2025年9月より全世界帯を対象に第1子無償化という、更なる方針が表明された。このような子育て支援制度の充実化に伴い、かつては未就園児といわれた0-2歳児の保育・教育の需要は、近年ますます高まる傾向にある。

また、2017年度版の保育所保育指針の「教育」については、幼保連携型認定こども園や幼稚園と並び、保育所は初めて「幼児教育を行う施設」と位置付けられ、同施設における教育の重要性が改めて示されるかたちとなった。

一方、保育者養成校のピアノ演奏・指導研究は伴奏法や弾き歌いなどが中心で、歌唱活動以外に焦点を当てたピアノ研究は未だ少ない。現場では、乳幼児の音楽指導として、伴奏以外に求められるピアノ演奏技術はないのだろうか。

各保育・教育施設より本学へ寄せられた求人票のデータ研究（福田：2017）によると、音楽に対する特記事項で最も多かったのは、保育所におけるリトミック関連の記述である。主な内容としては、「リトミックの指導スキルを持つ人材を求める」「福利厚生としてリトミック指導資格取得を援助する」等が挙げられる。

以上の結果を受け、0-2歳児の音楽活動をより充実させる方法として、保育現場での需要が高いリトミックを取り上げ、2歳児のリトミック・レッスンを例に、そのピアノ演奏法について考察する。

## II 研究目的

以下、①～③の背景を受けて、リトミックにおけるピアノ演奏法の研究をおこなう。

### ① ピアノ授業の現状

2024年度現在、本学では1年次に「ピアノⅠ」、2年次に「ピアノⅡ」の授業が開講されている。

「ピアノⅠ」は必修科目であり、ピアノの演奏技術の基本と童謡伴奏の基礎を学ぶ。また、「ピアノⅡ」は選択科目であり、保育・教育現場で必要となる生活の歌や季節の歌の弾き歌い演習を通して、子どもの音楽活動に必要な実践力、応用力、表現力を習得する。以上のように、本学のピアノ授業は、子どもの歌の伴奏法を柱として、ピアノ実技演習を1年ないし2年積み重ねていく。

## ② 社会の要請

厚生労働省のホームページで独り稼ぎ世帯と共働き世帯数の年次推移をみると、1980年には前者が1104万世帯、後者が614万世帯であったが、2019年には前者が582万世帯、後者が1245万世帯と完全に逆転し、今後も共働き世帯の増加は続くものと予想され、かつては未就園児といわれた0-2歳児の保育・教育の社会的要請は、近年ますます高まる傾向にある。

とりわけ「教育」については、幼稚園指導要領（2017）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（2017）と並んで、保育所は保育所保育指針（2017）において初めて「幼児教育を行う施設」と位置付けられ、『幼児期までに育ててほしい10の姿』：①「健康な心と体」、②「自立心」、③「協同性」、④「道徳性・規範意識の芽生え」、⑤「社会生活との関わり」、⑥「思考力の芽生え」、⑦「自然との関わり・生命尊重」、⑧「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」、⑨「言葉による伝え合い」、⑩「豊かな感性と表現」が示され、保育者・教諭はこれらに沿って保育・教育計画の作成・実行・評価を行うことが求められた。

## ③ リトミック指導の教育効果

リトミックは、スイスの音楽教育家エミール・ジャック=ダルクローズ（Jaques Dalcroze, Emile；1865-1950）が21世紀初頭に創始した教育法である。

ダルクローズは、著書『リトミック・芸術と教育』（板野平・訳）の中で「リズム運動を教えることは音楽を基盤とするものであるが、単に音楽学習にとどまらず、むしろ一般教養の一体系なのである」と述べている。ダルクローズが提唱するリトミックは、単に音楽のリズムに合わせて身体を動かすだけではなく、1.ソルフエージュ（声による音感教育）、2.リズムック・ムーブメント（身体運動を伴うリズム・表現教育）、3.インプロヴィゼーション（即興表現による表現教育）という三つの要素で構成されている。

以上のように、ダルクローズのリトミックで歌唱の基礎を作り、音楽を注意深く聴く耳と即時反応力、感じ取ったことを全身で表現する力を育てることで、先述の「幼児期までに育ててほしい10の姿」のうち、①「健康な心と体」、②「自立心」、⑥「思考力の芽生え」、⑩「豊かな感性と表現」が養われる。さらに、リトミックは通常グループ・レッスンで行われるため、③「協同性」、④「道徳性・規範意識の芽生え」、⑤「社会生活との関わり」、を育む効果が期待される。そして、後に実践例として挙げる「おはなしリトミック」では、様々な内容の紙芝居や絵本と関連付けて活動を行うため、⑦「自然との関わり・生命尊重」、⑧「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」、⑨「言葉による伝え合い」、に関しても子どもの成長を促す効果がある。つまり、紙芝居や絵本の読み聞かせを取り入れたダルクローズのリトミックは、国が示した「幼児期までに育ててほしい10の姿」のすべてにおいて有効な教育活動といえよう。

## Ⅲ 研究方法

以下に、筆者による2歳児のリトミック・レッスンのピアノ演奏例を挙げる。レッスン実施は

2024年9月、2歳2か月～2歳9か月までの生徒7名のグループ・レッスンである。そこに各保護者が必要に応じてサポートに入るかたちでレッスンをおこなった。

主な指導の流れは、ダルクローズのリトミックに則り、①ソルフェージュ ②即時反応 ③おはなしリトミック（紙芝居の読み聞かせの後、そこに描かれた情景や登場人物の心情を、音楽に合わせて自由に身体表現する）である。次章では、①～③における演奏例を考察し、リトミック指導で求められるピアノ演奏力を導く。

#### Ⅳ 結果と考察

##### ① ソルフェージュ

子ども達は、レッスンのご挨拶をしながら指導者の模唱を繰り返すことで、「声帯をコントロールして音程を作る」という歌唱の基礎作りをする。ここで扱う旋律は、2度音程の3音という極めてシンプルなものからスタートする（譜例-1）。

##### 【譜例-1】

先生 生徒 先生 生徒  
みなさん はーい みなさん みなさん

次に、メロディに強弱や様々なアーティキュレーションもつけて模唱を繰り返すことで、歌唱表現力はもとより、音を注意深く聴く集中力と即時反応力も養う（譜例-2）。最初は「皆さん⇒はーい」と、全員に呼びかけて皆が呼応するが、慣れてきたら「○○ちゃん（君）⇒はーい」と、一人一人に呼びかけ、個々人の音程や声の大きさを確認し、習熟度に応じて少しずつ音程を広げていく。

##### 【譜例-2】

先生 生徒 先生 生徒  
f ○ ○ ちゃん はーい p ○ ○ ちゃん はーい

譜例-1, 2で示したとおり、ソルフェージュで必要なピアノ演奏技術の基本は、右手で簡単な3音の即興メロディを弾き歌いできること、左手でI・IV・Vの和音伴奏が弾けることである。これらは、初心者にも充分可能な演奏レベルであるが、ここで重要なのは子どもに向かって歌いかけ、子どもの反応をよく聞いて次の活動に発展させることである。つまり、ブラインド・タッチ（鍵盤から目を離して演奏する）が不可欠である。

## ② 即時反応

リトミックの指導は、静と動の聞き分け、つまり音楽が鳴っているときは動き、音楽が止まると動きを止めることからスタートする。ウォーミングアップの中で、はじめは4小節毎など、規則的にピアノの演奏を止めて、子ども達が音を聞いているか確かめる（譜例-3）。

### 【譜例-3】

『子犬のマーチ』より

そして、徐々にランダムなゴー&ストップに発展させることで、音に対する集中力と即時反応力を育成する（譜例-4）。

### 【譜例-4】

次に、4分音符（歩く）、8分音符（走る）、2分音符（ゆっくり歩く）という3つの音価の聞き分けに入る。例えば、「森へお散歩に行こう」というテーマで音楽のビートに合わせて歩き、森で出会った様々な動物たちの歩き方を模倣することで、上記3つの音価を即座に聞き分け身体運動に置き換えるトレーニングをおこなう（譜例-5）。

【譜例-5】

《となりのトトロ》より『さんぽ』

【犬】



【クマ】



【ネズミ】



以上3つの音価の即時反応が完成したら、ビートに合わせてジャンプ（ウサギ）や片足立ち（フラミンゴ）など、運動機能の発達を促す活動を取り入れる（譜例-6）。

【譜例-6】

『いとまき』より

【うさぎ】



【フラミンゴ】



リトミック指導は、ピアノの即興演奏による即時反応が一般的である。ダルクローズ自身も、ピアノが子どもたちを音楽の領域に運ぶことが出来ると考え、リトミックの即興演奏楽器を「ピアノ」と指定している（フランク・マルタン他1977）。一般的に、ピアノの即興演奏には豊富な演奏経験と高度な技術が必要とされるが、2歳児のレッスンにおいて筆者が様々な旋律の音楽を試した結果、メロディは子どもたちに耳馴染みのある童謡やシンプルなアニメ曲を使用し、伴奏の音価を即興的にアレンジする方法が、ビートの聞き分けに最も有効で、かつ楽しく能動的に活動できることが分かった。つまり、高度な即興演奏の技術がなくても童謡レパートリーを応用することで、2歳児のリトミック・レッスンの大枠をカバーすることは充分可能といえる。

以上のように、2歳児リトミックで最も重要な3種の音価の即時反応は、童謡演奏を基本におこなえる。なお、子どもたちの活動を見ながら演奏を止めたり再開したり、伴奏型を変える必要があるので、ソルフェージュと同様にブラインド・タッチは不可欠である。また、音楽に様々なニュアンスを与える強弱表現やアーティキュレーション、速度変化は、子どもの表現力を伸ばし、レッスンを楽しく進めるために重要であることがわかった。

### ③ おはなしリトミック

「おはなしリトミック」とは、先述のとおり紙芝居や絵本に描かれた情景や登場人物の心情を、音楽に合わせ自由に身体表現する活動である。大浦（2022）も、物語とリトミックの融合は、「子供たちが、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」活動として、教育的効果を示している。

ここでは、紙芝居『おおきなおおきなおさかなパン』（教育画劇出版:2004）のおはなしリトミックを例に挙げる。

・あらすじ：

ネコの親子が作ったおさかなパンが、オープンの中でどんどん膨らみ、家を飛び出して空を飛ぶ。小鳥たちは、おさかなパンを見つけてかじり、空気が抜けたおさかなパンは萎んで池に落ちる。ネコたちは慌てて池からおさかなパンを釣り上げて、おなかを割ったところ、お魚がたくさん出てきて、皆で仲良く大好物のパンとお魚をおなかいっぱい食べた。

本レッスンでは、①パンを作る→②パンが膨らみ、萎む→③おさかなパンが空を飛ぶ、この3つの場面をリトミックで表現することにした。

① パンを作る：ゴムボール（直径約20センチ）を使った活動。

・材料を混ぜる：ボールで床の上に円を描くように、手のひらでボールを転がす（譜例-7）。

#### 【譜例-7】

・生地をこねる：ボールを床の上において、上から手のひらで潰すように押す（譜例-8）。

【譜例-8】

Musical score for Example 8, piano accompaniment in 4/4 time. The right hand plays a melody of quarter notes with accents, and the left hand plays chords with accents. The dynamic is marked *mf*.

・生地を整形する：床に置いたボールを手のひらでパンパンと叩く（譜例-9）。

【譜例-9】

Musical score for Example 9, piano accompaniment in 4/4 time. The right hand plays a steady melody of quarter notes, and the left hand plays chords. The dynamic is marked *mf*.

・パンがオープンから飛び出す：ボールを天井に向けて両手で投げる（譜例-10）。

【譜例-10】

Musical score for Example 10, piano accompaniment in 4/4 time. The right hand plays a melody that increases in volume (*cresc.*) and ends with a fortissimo (*ff*) chord. The left hand plays a steady melody. The dynamic is marked *pp*, and there is a ritardando (*rit.*) marking.

② パンが膨らみ、萎む：平ゴムを使った活動。全員で平ゴム（両端を縫い合わせ、円状のもの）を両手に持ち、音楽に合わせて広がる⇔集まって縮む、を繰り返す（譜例-11）。

【譜例-11】

Musical score for Example 11, piano accompaniment in 4/4 time. The right hand plays a melody with lyrics, and the left hand plays chords. The dynamic is marked *f* and *p*.

おお きく おお きく ふく らん で ちい さく ちい さく しぼ みま す

③ おさかなパンが空を飛ぶ：市販のゴミ袋（20ℓ）を使った活動。ゴミ袋に空気を入れて開口部を縛り、ボールにする。これは市販のゴムボールと比べて大変軽く、ゆっくり宙に浮いて落ちるため、2歳児でも音楽に合わせた活動が比較的容易である。このボールを使って、「音楽に合わせて天井に向かって投げ、キャッチする」、を繰り返し、1拍目に向かうアナクルシスを充分に体感させる（譜例-12）。

【譜例-12】

以上が、「おおきなおきなおさかなパン」のピアノ演奏例である。ここでは、即興演奏で指導をおこなったが、複雑な旋律やリズムは活動に混乱を招くため、いずれも基本的な音階と主要三和音がベースである。なお、子どもの想像力が身体を通して自然に、そして豊かに表現されるよう、ピアノ演奏者にも柔軟で幅広い表現力が必要なことは言うまでもない。

## V 結論

2歳児のリトミック・レッスンにおけるピアノ演奏力として、①ブラインド・タッチ、②コード・アレンジ力、③豊かな感性と表現力、以上3つの力が求められることが示された。

① 童謡伴奏でありリトミック指導であれば、ブラインド・タッチ、つまり鍵盤から目を離し、子どもの様子を見ながら演奏することは指導者としての基本であるが、ピアノ初心学生の多くは五線上の音程と鍵盤の幅感覚の一致に対する不安から、楽譜と指の動きを交互に確認しながら演奏をおこなう。しかし、試しに学生の手を楽譜等で隠して演奏させると、ほとんどの学生は手元を見なくても問題なく弾けることに、そこで初めて気づく。まずは、童謡伴奏に類出する2度音程と3度音程、I・IV・V和音のブラインド・タッチの基礎練習を充分におこなった上で、レッスン中の学生の視線の動きを観察し、必要に応じて助言を与えて指導を繰り返すことで、リトミック指導に必要なブラインド・タッチの習得も可能であると考えられる。

② リトミックを保育現場で取り入れることのハードルのひとつとして、即興演奏技術が挙げられる（2024：前田）。しかし、前章で示した通り、2歳児のリトミックは、子ども達に馴染みのある童謡メロディや、ハ長調の音階を基本に展開できる。また、そこで用いられる基本的な伴奏型、つまりビートの聞き分けに必要な8分音符、4分音符、2分音符の3パターンによる基本的なコード・アレンジの習得は、本学のピアノIおよびIIでも繰り返しおこなう内容である。具体的には、様々な童謡に取り組む中で左手をアルベルティ・バスや重音のバックギンなどに変奏する指導を取り入れ、童謡伴奏の基本を徹底することで、2歳児のリトミック指導を行うことは充分可能である。

③ 2歳児のリトミック活動は、指導者の模倣から始まり、継続することによって子ども達は表現

の楽しみを体感し、自らイメージして自由に表現できるようになる（中根・瀧川2020）。

したがって、指導者の表現力は子どもの表現力を伸ばす大きな鍵であり、リトミック・レッスンの生命線と言える。では、リトミックで求められる指導者の表現力とは、具体的にどのようなものか。ダルクローズは、リトミックの実践においてタイム、スペース、エナジーの概念、つまり、動きの「速さ」、「大きさ」、「強さ」の三要素が相互関係をもって身体表現に生かされることが大切であると述べている。ピアノⅠ・Ⅱレッスンにおいても、単に音符を追うのではなく、楽譜や歌詞から様々な情景や心情を汲み取り、それらを豊かに反映させた演奏へと学生を導くことが重要である。

以上①～③は、童謡伴奏をおこなう上でも不可欠な基礎力であり、繰り返し指導する内容である。2才児のリトミック指導は、それらを使用また応用することで可能になることが示された。

## Ⅵ まとめ

インターネットを利用することで、多種多様な音源が容易に入手できる時代になった。これらを積極的に活用し、音楽活動をおこなうことは当然ながら推奨されるべきであるが、一方で指導者の即興演奏によるリトミック活動は、子どもたちの自由な創造性を高め、集中力や豊かな感性を育むために極めて有効な教育活動である。

本学の入学生の半数以上はピアノ初心者であるため、今回の研究で得られた3つの演奏力、つまり①ブラインド・タッチ、②コード・アレンジ力、③豊かな感性と表現力、を獲得することは容易でない。しかし、はじめから高度な専門性を目指すのではなく、在学中は専門性に関する基礎・基本を身に着ける期間と捉えて練習に取り組み、そこで培ったピアノ演奏技術を子どもたちとの関わりの中で少しずつ応用し、様々な場面で生かすことに挑戦してもらいたい。

今回は、0-2歳児の音楽活動におけるピアノ演奏研究として、歩行が完成しリトミックの基礎的な活動が可能となる2歳児を例に研究・考察をおこなったが、0-1歳児の活動では、また異なる演奏技術が要求される。さらに、3歳以降のリトミックはポリリズムやカノンに発展していくため、それらの活動に必要な演奏技術も求められる。以上については、引き続き研究する予定である。

## 引用・参考文献

- 文部科学省（2017）『幼稚園教育要領（2017年告示）』フレーベル社  
内閣府・文部科学省告示第1号・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育保育要領（2017年告示）』フレーベル社  
厚生労働省（2017年）『保育所保育指針（2017年告示）』フレーベル社  
フランク・マルタン他（1977）『エミール・ジャック＝ダルクローズ』板野平訳、全音楽譜出版社、372頁  
大浦知加（2022）「感覚間協応に基づく表現活動についての一考察—絵本リトミックの提案—」大阪千代田短期大学紀要 第51巻、20頁  
福田久美（2017）「保育・幼児教育現場で求められる表現力の考察—2015年度本学求人票の分析を通して—」有明教育芸術短期大学研究紀要 第8巻、54頁  
中根佳江・瀧川光治（2020）「保育の場における身体表現に関する研究動向—リトミック活動を通して—」大阪総合保育大学紀要 第15号 1-7頁  
前田恵（2024）「保育者養成校におけるリトミックの実践と課題—「社会福祉学特別演習Ⅱ」「幼児教育実践演習」の履修学生を対象として—」帯広大谷短期大学紀要 第61号、17頁



論 文

《その他》

## 地域貢献と e スポーツ

### Contributing to the community through e-sports

伊庭 崇 (Takashi Iba)

#### 要約：

アジアのオリンピックと呼ばれるアジア競技大会で正式種目となった e スポーツ。様々な大会が全国各地で催され、昨今では専門雑誌も創刊され、テレビでもレギュラー番組として放映され、注目を集めている。その e スポーツが今、教育現場や福祉施設等で活用され始めている。親子で楽しめる e スポーツは、地域貢献の中にも浸透してきている。地域貢献の中でどのように活用され、どのような利点があるのかを考察する。

キーワード： e スポーツ 地域活性化 地域貢献

#### I. はじめに

e スポーツとは、「エレクトロニック・スポーツ」の略で、広義には、電子機器を用いて行う娯楽、競技、スポーツ全般を指す言葉であり、コンピューターゲーム、ビデオゲームを使った対戦をスポーツ競技として捉える際の名称であり、一昔前のテレビゲームとは異なる認識を持たれ始めている。その e スポーツが今、教育現場や福祉施設等で活用されている。教育現場では部活動として活動しているだけではなく、全日制、通信制を問わず、学科・コースとして設置している学校が増え始めている。

また、福祉施設等では麻雀やチェス、カードゲームに続き、e スポーツが浸透してきている。さらに、e スポーツ教室を開講している団体等も数多くある。

そして地域貢献の中では、どのように活用されているのか、どのように発展していくのか。

#### II. 地域活性化・地域貢献

2010年ごろから地域活性化や地域貢献といった言葉が注目されるようになり、地域が持つ環境や文化、コミュニティなどを活用し、活気ある街づくりを進める取り組みを自治体や各種団体が中心となり活動している。その目的は、住民の意欲向上や持続可能な地域社会の創出などで、地域内外からの注目を集め、地域の課題解決や地域の将来を見据えた持続可能な発展を目指している。その取り組みには様々なイベントの開催や観光資源の開発、資源を生かしたサービス提供、地元産業の振興、新しい事業の支援などがある。特に少子高齢化や人口減少の問題に直面する地域にとっては重要な取り組みとなってくる。地域活性化を成功させるには、地域全体での協力と持続的な取り組みが必要であり、地域貢献として地元の企業や個人がボランティア活動や地域イベントの開催、環境保全活動に取り組んで地域コミュニティの創出や地域の人々とのつながりを深めている。

地域貢献活動には主に次のようなものがある。

- ・ボランティア活動
- ・コミュニティ活動
- ・祭事や伝統行事の開催や維持
- ・商店街の活性化
- ・高齢者施設や障がい者支援施設での活動
- ・職場体験やインターンシップの受け入れ
- ・ニートやフリーターの雇用
- ・地域の観光資源を活用
- ・リサイクルへの協力

### Ⅲ. 品川学藝高等学校の取り組み

#### 1. これまでの取り組み

東京都品川区にある私立学校、品川学藝高等学校は、地元の品川区で開催される祭りやイベントにこれまでに数多く参加している。品川区大崎駅西口商店会主催のイベント「しながわ夢さん橋」では音楽コースの生徒が楽器演奏を行ったり、しながわ第9実行委員会主催の「第9を歌おう！」では有志の生徒や教員が合唱隊のメンバーとなり、年末に地元ホールのきゅりあんで発表をしている。また幼児教育コースの生徒は、近隣児童館のゆたか児童センターにて、「赤ちゃんとのふれあいイベント」で乳幼児とその保護者との交流を深めてきた。また、JR大井町駅前では、大井駅前中央通り商店会等が主催するイベント「大井町ハロウィン」で、教員が出店を出し、近年では大井銀座商店街振興組合等主催の「大井どんたく夏まつり」でeスポーツコースの生徒たちがeスポーツ体験の出店を出した。商店街役員との打ち合わせにも参加し、地域の商店街の人々との繋がりを深めた。

それ以外にも、最寄り駅である東急大井町線下神明駅と荏原警察署とともに、学生ボランティア「シンデレラへの道」として痴漢撲滅キャンペーンを行い、安心して駅や電車を利用できる環境づくりに協力した。

#### 2. 新たな取り組み

2024年、eスポーツコースに在籍する生徒たちの新しい試みとして、地元品川区にある品川区立品川高齢者多世代交流支援施設「北品川ゆうゆうプラザ」にてeスポーツ体験を実施した。この施設では、高齢者を対象にした「eスポーツで遊ぼう！」という企画を毎週日曜日に実施しており、学生企画として「多世代ゲーム交流会」を行うことになった。大井どんたく夏まつり同様、慶應義塾大学の加藤貴昭教授とその研究室の学生たちとの共同で企画し、実施に至った。

初回の打ち合わせでは、加藤教授から高校生に地域貢献の意味と意義についての講義があり、その後、学生と生徒たちが小グループに分かれ、eスポーツでできることなどグループワークを行った。また、2回目の打ち合わせでは、実際に訪問・実施するにあたっての機材の準備や訪問時の留意点、コミュニケーションの取り方、説明の仕方等を確認した。



写真1：加藤氏による講義



写真2：グループワークの様子

1回目のグループワークでは、高校生の小グループに大学生が入り、3つの観点「高校生が高齢者とゲームを行う意味」、「高齢者が行うのに適したゲーム（その長所、懸念点と対策）」、「アクティビティに向けて具体的にできること」について話し合った。高校生が活発に意見を出し、それを大学生がまとめていった。後に大学生が「大学生や大人では思いつかないような発想をして驚いた」と語っていた。高校生からは「刺激を受けた」、「地域貢献に参加したい」、「当日が楽しみ」といった声が聞こえた。

そしてグループごとに発表し、全体でディスカッションを行った。そこでも様々な意見や質問が出され、高校生や大学生にとって有意義な時間であったようだ。

それぞれのグループで出された意見を以下でまとめる。

#### 課題A：高校生が高齢者とゲームを行う意味

- ・若者が関心のあるもので交流を図る，高校生と高齢者の繋がり
- ・同じことをして一緒に楽しく交流できる
- ・多世代交流，交流促進
  - ・コミュニケーション
  - ・脳の活性化
  - ・健康に良い，体（筋力）が強くなくてもできる

#### 課題B：高齢者が行うのに適したゲーム（その長所、懸念点と対策）

##### 【選んだゲームの長所】

- ・プレイしやすい
- ・操作が簡単，ボタン操作が少ない，シンプル
  - ・馴染みのある題材のゲーム
- ・会話が発生しやすい

- ・脳の活性化，認知症改善，反射神経，判断力が鍛えられる
- ・適度な運動量，体を動かすから健康に良い
- ・運転や運動など日頃行っている動作を使うゲーム
- ・耳が不自由な人でも楽しめる

#### 【選んだゲームの懸念点と対策】

- ・アイテムの使い方がわからない
  - 教える，設定で簡単なものだけにする
- ・コントローラーの操作がむずかしい
  - 高校生がサポート
  - 簡単な説明書を近くに置いておく
  - 押すボタンにシール貼る
- ・運動能力に個人差がある
  - 自分のペースで体を動かさせてあげる
  - 楽しむことを優先
- ・激しい動きによる体への影響（怪我・過呼吸）
  - 長い時間のプレイは避け休憩を取る

#### 課題C：アクティビティに向けて具体的にできること

- ・機材やマニュアルの準備，ゲームの設定を決めておく
  - ・事前にプレイしてからゲーム内容，操作方法，難易度，懸念点の確認
  - ・簡単なゲームを選定
  - ・難しいゲームを選定
- ・ゲームをする前にストレッチをしてもらう
- ・身体不自由な高齢者にどう楽しんでもらうかを考える



写真3, 4：当日の様子（施設にて）

品川学藝高等学校 e スポーツコースの高校生は、この企画を実施するにあたり、加藤教授や大学生たちとコミュニケーションを図りながら準備を進め、施設の職員やイベントに参加者した高齢者たちとコミュニケーションを図り、地域の人々との繋がりを深め、地域コミュニティを創出した。まさに e スポーツを活用して地域貢献に携わったといえよう。

#### IV. e スポーツを活用した取り組み

##### 1. 高齢者との取り組み

現在、高齢者の健康や地域とのつながりを促進する取り組みが盛んに行われている。中でも、e スポーツをとり入れる自治体や地域企業が近年増加傾向にある。

慶應義塾大学環境情報学部教授 加藤貴昭教授らの調査によると e スポーツは認知機能の向上の可能性があると報告されており、健康促進についても期待されている。具体的には、手指を使う動作による認知症の予防や、プレイ中のコミュニケーションなどを通して、高齢者の健康増進に活用しようとする事例が挙げられ、さらに、リアルスポーツにはない長所として、リモートで実施できる点がある。通信環境さえあれば、コロナ禍でも過疎地域でも継続して実施可能であること、高齢者のデジタルリテラシー向上に寄与できることが期待できる。

また、秋田県にある e スポーツチーム「MATAGI SNIPERS」は、【孫にも一目置かれる存在】をスローガンに掲げ活動する、平均年齢67歳の e スポーツチームである。フォートナイトやヴァロラントなどの若年層にも人気の高いシューティングゲームのプレイを通じて、高齢者の健康増進や認知機能維持だけでなく、世代を横断したコミュニティの形成を目的として活動している。

##### 2. 自治体・企業の取り組み

地域活性化を生み出す中心となるのは、いわゆる Z 世代の若者たちである。ある大手電気通信企業は、e スポーツを通して若者が活躍できる場を作りたい、さらには若者や子どもたちがデジタル人材として成長し、中心となったうえで高齢者や障がい者を含めて町の経済全体を活性化させていくことを目指し、商店街などを巻き込んで e スポーツのイベントを開催し、地場産業などの PR を行っている。

他にも、地域活性化を目的とした取り組みを企業や団体とともに実施している自治体が多数ある。そのいくつかを以下に挙げる。

###### 【北海道湧別町】

学生たちが町の祭りや行事に携わり、そのメニューの一つに e スポーツ大会を実施し、「e スポーツを活用したまちづくり」を行っている。

###### 【山形県長井市】

e スポーツの施設を構築し、そこで地元の若者たちがスキルアップに励んだり、小学生向けのプログラム体験を実施。また、ホテルなどの宿泊施設を会場として住民交流大会などを開催。

###### 【東京都調布市】

e スポーツを市民の生活向上に役立て、e スポーツでにぎわいを作りたいと考え、「施設内交流」、「施設間交流」、「交流範囲拡大」の3つを方針として取り組んでいる。

施設内交流は、高齢者施設の入所者や障がい者施設、児童施設の子供たちを対象に、その施設内でイベントやプログラミング教室を催すもの。

施設間交流は、施設をまたいで対抗戦を行うもの。

#### 【東京都渋谷区】

障がい者を対象にしたeスポーツを通しての交流機会の実現や、高齢者向けの体験会を開催。介護予防や認知症予防の観点で、「高齢者向けのeスポーツ」プログラムを展開。

#### 【東京都立川市】

地元企業の対抗戦や大型のeスポーツフェスなどを開催。ファミリー向けには屋外イベントを実施し、地元の企業は協賛や出店という形で参加。

#### 【埼玉県朝霞市】

児童館が主となり、児童・生徒が自ら考え、楽しく遊び・学び、安心して過ごすことができる「居場所づくり」のため、朝霞市eスポーツ部の協力を得て児童館におけるeスポーツを活用した取り組みを進める。

開催したeスポーツ交流会では、企画・運営を中高生が担い、参加した小中高生と電気通信企業の社員が交流を深めながら実施。

児童館の更なる利用促進の解決策にもつながると考えている。

### 3. 地域に根づくeスポーツ教室

近年では習い事の一つとしてプログラミング教室やeスポーツ教室などが増えてきている。小学校でも2020年度からプログラミングの授業が必修化となり、子ども向けのプログラミング教室が増える中、保護者も子どもに教えることができない分野なのか、その需要も高まってきている。eスポーツ教室に関しても、プロが教えてくれるという教室も多く、しかもオンラインで実施となれば、自宅で学べることからも安心して受講させることができ、こちらも需要が高まってきている。eスポーツ教室では、スキルの向上を目指すだけでなく、注意力・集中力・判断力、瞬発力などを身につけることも目的としているところが多い。しかし、eスポーツを学ばせる際に注意しておかなければならないことも多数ある。以下、子どもにeスポーツを学ばせる際の注意点を挙げる。

#### ・健康面の不安

長い時間、コンピュータに向かって座った姿勢でプレイする。長時間同じ姿勢でモニターを凝視することになるので、筋力低下や腰痛、肩こりなどの身体面での不調を生じることがある。また、視力や聴力の面でも不安要素が挙げられる。

#### ・依存症の恐れ

自宅の部屋などで他人に干渉されずプレイを継続できるメリットがある反面、自分自身でゲーム時間をコントロールできなくなる依存症に陥ってしまう恐れがある。

#### ・コスト面

コンピュータでネットワークを介して世界中のプレイヤーと競技するため、そのコンピュータの性能が大きく影響し、ハイスペックの機器を揃える必要がある。

また、ゲームソフトやシステムの進化などにより常に投資を続けなければならない側面がある。

その他にも考えられるが、心配・不安だからやらせないのではなく、許容範囲内で上手に使わせることを考え、eスポーツに携わってもらいたい。

## V. まとめ

eスポーツの魅力、可能性はまだまだ十分に理解されていない部分がある。教育現場では、子どもたちの創造性、独創性を育み、福祉施設の現場では、脳の活性化、認知症の予防、健康促進を目的として活用されている。そして、地域活性化や地域貢献にも継続可能な取り組みの一つとして、eスポーツは活用されはじめた。今、Z世代が企業や自治体を巻き込んでeスポーツを活用したイベントを企画・実施し、その地域を元気な街に、活力ある街に、魅力ある街にしていこうと、多世代交流をしながら地域コミュニティの創出や地域の人々とのつながりを深めている。そしてその活動は、持続可能なものとして、これからも進歩していくと思われる。

eスポーツはただのゲームではなく、教育や福祉、コミュニティ創作や地域貢献に大きくかかわっていけるツールであるといえよう。

### 参考文献・引用文献：

・日本スポーツ産業学会Webジャーナル <https://sportsbusiness.online/>



論 文

《実践報告》

# 2024年度実践教育研究会実施報告書

子ども教育実践総合センター

山田 麻美子

2024年度実践教育研究会を下記のように行った。概要と研究会内容を次に記す。

## 1. 2024年度実践教育研究会実施要領

日 時：2025年1月17日(金) 18:00～19:30

会 場：有明教育芸術短期大学 301教室

テーマ：「保育・教育現場あるある話 Part II」

参加者：有明教育芸術短期大学 専任教員14名、非常勤講師1名 学生40名

外部講師：港区立お台場学園港陽小学校・中学校 校長 大島 一浩 先生

港区立お台場学園港陽小学校 副校長 庄司 哲也 先生

YMCAオリーブ保育園 園長 矢野 久美 先生

江東区立豊洲幼稚園 園長 福原 良子 先生

グループ編成

○Aグループ 15名

外部講師 お台場学園港陽小中学校校長 大島一浩先生

専任教員3名・1年生2名・2年生5名・3年生4名

○Bグループ 13名

外部講師 お台場学園港陽小学校副校長 庄司 哲也 先生

専任教員2名・非常勤講師1名・1年生1名・2年生3名・3年生5名

○Cグループ 15名

外部講師 YMCAオリーブ保育園園長 矢野久美 先生

専任教員2名・1年生5名・2年生5名・3年生2名

○Dグループ 12名

外部講師 江東区立豊洲幼稚園園長 福原良子先生

専任教員3名・1年生2名・2年生3名・3年生3名

開会に先立ち山田センター長より、当年度の研究会のテーマについて昨年度に続きのPart IIとして開催する説明がなされた。

## 2. 研究会

開会の挨拶の後、深澤学科長より「本研究会に興味を持ち多くの学生が参加を希望してくれた、これから実習に参加する学生は近隣からお越しいただいた先生方から話をうかがえる本研究会を実

習の心構えとして役立てて欲しい」と挨拶があった。

続いて山田センター長より4名の外部講師の紹介がなされ、A～Dの4グループに分かれ研究会が開始された。各グループの内容を以下に報告する。

#### ①Aグループ

Q：新卒の教員が躓きやすい点や学級経営心構えなどについて。春から教員になることで気を付けておく点はどんなことか。

A：まずは健康が第一。苦手なこと、不調な点があればきちんと周りの先生に伝えること。子どもたちのお手本になるように教師自ら率先してルールを守る。子どもたちに話が届いているか、コミュニケーションが取れているのか、声の大きさが重要。あいさつするなど当たり前のことができるように。

Q：やる気がない子どもやついてこない子どもに対してどのようにすればよいか。

A：一斉指導の難しい点であるが、そのままにしておかないでちゃんと声をかけ、子どもに無理をさせないよう気を付ける。子どもが声をかけてほしいのかもしれない。全体を見る視野の広さが必要。子どもたちの名前を覚えるなど一生懸命さが伝わるのが大切。指示が通るよう大きな声ではっきり話すことや安心感が大切。

Q：東京は自然が少ないので、自然についてどのように伝えればよいか？

A：お台場は海が近いので鳥がやってきたり生き物に興味を持って行ったりできる。ちょっとしたことから自然への学びを広げることができる。

Q：教師としてのやりがいとは何か。

A：子どもたちの成長を見ることが一番で、小学校6年間、小中なら9年間の成長と一緒にできる。

Q：実習先の幼稚園では1人1机で教えていたが、小学校から中学校へのつながりについてどのようなことがあるか？

A：小学校5・6年生になると部活動体験や中学校の先生が家庭科、音楽など専門の授業を指導している。保育園、幼稚園、児童館とも連携し情報交換や研修会を実施している。

その他、模擬授業の目当て、一人1台端末の利用方法や服装など保護者との関わり方、これからの授業・教師の課題、拝領を必要としている子どもや特別支援についてなど、さまざまな質問があり事例などを紹介していただきコメントをいただいた。それぞれの問題、課題に個性のある先生がひとりではなく協働しチーム学校として運営にあたっている。今の小学校がどのように運営され課題や問題を解決しているのかなど春から教員につく学生やこれから試験を受ける学生にとって貴重なお話をうかがうことができた。

#### ★グループ代表学生のまとめ（学生）

（2年男子）

小学校教員になるうえで声の大きさ（指示など通り易い）の重要性や常時見られている（手本になれる）意識を持つ事、自身が「健康」である事の大切さを認識できた。また、チームで動いている環境なので誰かが助けてくれる事が分かった。

#### ②Bグループ

Q：教員の仕事に関して、特に放課後の教員の仕事はどのようなものであるのか。

保護者との対応の仕方で大事なことは、どのような点があるのか。

A：はじめに、これまでの教員生活を振り返りたい。副校長としての仕事は、先生方の職場環境を考え、また、主に保護者の対応を行っている。保護者対応については、普段の子どもの様子を通して、親がどのような人間であるのかをみることにしている。保護者対応においては、保護者との信頼関係、説明責任が重要であり、丁寧に保護者の主張を「きくこと」が大事である。教員を目指す学生には、「教師になりたい気持ち」を大事にして、教育の「夢をもらいたい」。

Q：学級経営については、何を大切にしているのか。

A：たえず子どもと一緒に考えること、「同化する」こと。子どもに教えたいという気持ちをもつこと。教員は「責任、集中、積極性」が大事である。

若い教員の課題は昔の指導とは違うことを踏まえ、教師を育てることである。

Q：一年目の教員には、何が大事であるのか。

A：特に、学級の運営については、前例にとらわれてはならないこと。「子どもは違う」ということを認識して、教育実践を行うことが大事である。

#### ★Bグループ代表学生のまとめ

やらなければならない事は多いが謙虚さを大切にし、個性豊かな人が多いな分からない事は質問してゆくことにより何とかなっていく。「自分は出来る」と過信せずしっかりと計画を立てる事が大切である。正規教員も非正規教員も気持ちよく仕事が出来環境を整えていることが分かった。

#### ③Cグループ

Q：子どもとのかかわり（特に乳幼児）で気をつけることは何か。

A：子どもをよく観察し、子どもが何を求めているのか理解できるようにする。子どもとつながりを感じることで自信にもつながる。怖がらずに向き合うことが重要である。実習中は自分で必ずやることを決めて、例えば、座って目線を合わせる・大好きだよと抱きしめてあげる・待ってと言わず、子どもを第一に考え、電話がかかっても子ども優先で接するべき。

Q：実習中、一人の子どもに集中しすぎて周りが見えなくなった。

A：背中を子どもに向けないこと。どの位置に立てばより多くの子どもを見られるかを考えることが大切である。子どもたちも見られていることで安心感が生まれる。

Q：排泄介助に対する不安はどうすれば良いか。

A：教えてもらえるので心配する必要はない。不安であれば正直に伝え、例えば2回目の時に再確認することが重要。

Q：男性保育士は求められるか？

A：男性保育士は欠かせない存在であり、体力を活かして子どもと一緒に走って遊ぶことも大切。子どもたちは走ることが好き。男性保育士は前に出るだけで人気者になる。ニコニコ笑顔でいることが場を和ませる。

Q：実習中の休憩についてはどうか。

A：休憩時間は寝ることが多い。1時間の休憩があり、布団も用意されている。働き方も考慮されており、プライベートも大切にしながら働ける環境を作っている。ピリピリした雰囲気が子どもたちに影響しないようにすることが重要である。

Q：ピアノに対する不安について

A：ピアノは右手一本でも問題ない。歌いたい曲を子どもたちに歌わせることが大切であり、現状保育園では音源を使うことが多い。子どもたちの発想を引き出すことを意識し、一緒に考え、

そこから広げていくことが重要である。

A：参加者全員がキラキラした目をしていることを感じる。委縮せずにつづかっていってほしい。  
細かい失敗を恐れず、経験を積んでいくことが大切である。

#### ★Cグループ代表学生のまとめ

乳児との関わりでは遊び方を観察し視線を合わせて対応し、抱きしめてあげる事で安心感を与えてあげる事が出来る。「待ってて」は使わず背を向けずに子供達を大切に。一人だけに捉われる事の無いように奥まで見る事が大切。教員もリラックスできる環境である事が子供たちの安心につながってゆく。萎縮することなく自分を信じて子どもからも評価されている事を意識してゆく。

#### ④Dグループ

A：保育者で子どもを育むということはとても大変。でも素敵な仕事。園によって、やってはいけないことなどいろいろある。実習生はうまくできない。一生懸命やってみて担当の先生に教えてもらう。うまくやろうとしなくてよい。違うかもと思っても1回はやってみてほしい。実習に来ている先生（学生）と外で会ってもわからないことがある。実習以外でもこういう大人の  
人になりたいなあという先生であって欲しい。

園では経営方針に従ってほしい。子どもの前では正しい日本語。正しい姿勢。

子どもたちの好きな遊びでは横並び。オフィシャルとオフを分けてほしい。

呼び捨てにしない。その子を尊重する。幼稚園では〇〇ちゃん、〇〇君と呼ぶ。

講師より質問：どうして幼稚園の先生を目指そうと思ったのか、学生の皆さんに聞きたい。

Q：中学校の職場体験で小学校に行き、子どもと関わる仕事につきたいと思ったか

A：サッカーをあきらめ行きたい大学に行けなかった。子どもが好きだったので希望した。

教員より：私たちにとっては何気ない一言が傷つける一言になることもある。マニュアルもない、言葉が大事。15.6年前、講師の先生と同じ職場だった時、園児で乱暴な子がいたが「いい子の〇〇くん」と伝えたら変わった。魂と魂のつながりが必要。本気でその子の幸せのためにと接したが今は楽しくやっている。その子とどう向き合うか。学ばせてもらっている。

Q：実習もアルバイトでも叱らないと決めている。大人の都合でこれをしなさい、ではなくやりたくなるように仕向けている。ほめることを心掛けていると子どもたちの自分への見方が変わる。きつくいわないようにしているが良いか。

A：やってほしくないことをやる子がいた。その子にとって好きな人になっていなかったことに気づかされた。好きでいてもらうことからスタート。

教員より：指導計画をやらなくてはいけない。劇遊びも必要だけど何を今この子は求めているのか、保育では必要。（一日かけてゆとりのある教育ができる）

日本の幼児教育は良い。目の前の子どもたちを大切に。うまくいかないことがあっても楽しさを見つけてほしい。主体的な活動、子どもが取り組む、子ども発信で教育を組み立てられるところが日本の幼児教育のいいところである。

Q：子どものころ、どんな子どもだったのか。

A：やんちゃ、廊下で暴れていた・誰にでも話しかけていた。友達が多かった・好きな先生としか話せなかった。人見知り・好き嫌いが多く、食事が遅かった・泣いていた。お母さんと離れるのが嫌だった・やんちゃだった。

Q：子どもたちはみんな違うが大事なことは何か？

A：見えないところは助けてくれる。オーダーメイドの教育をする。その子の良さを育む。すぐには難しい。

★Dグループ代表学生のまとめ

先生の一言で満たされる事もあればその逆もある。一人の子どもに捉われず全体を把握し、出来ている子にはしっかり褒めてあげる、子どもが欲しがっている言葉を掛けてあげる事が大切。

### 3. 終わりに

外部講師から次のような感想を伺った。

Aグループ（大島先生）

この度、教員を目指す学生と直接話が出来た貴重な機会を得られてよかった。やりがいのある仕事ですので今の気持ちを大切にききめないうで頑張ってください。

Bグループ（庄司先生）

気持ちをくみ取り（教員に）になりたい気持ちや憧れを大切にしてください。

Cグループ（矢野先生）

キラキラした気持ちで、恐れる事なく子どもたちと向き合うことで良い保育士になれます。

Dグループ

この研究会に多くの学生が参加してくれた事が心強く嬉しく感じた。人を育む素敵な仕事です。難しい事もありますが、育み、見守り、諦めないで続けると様々な事が見えるようになってきます。がんばってください。

### 4. 若林 彰学長より挨拶

これからの世を背負ってゆく子ども達に携わる、保育、教育には夢がある素敵な仕事である。教育職がブラックで、保育職は大変である事だけが取り上げられすぎている傾向があるが、今日のエピソードも参考に頑張ってください。

2024年度は前年度までに比べて参加者数も多く、充実した内容であったことが推察される。今後もこれを継続して行っていきたいと考えている。ご参加頂きました方々に心よりお礼を申し上げます。



# 2024年度「子どもたちとともに」活動報告

伊藤菜々子

## I はじめに

本学では、1年次の「音楽Ⅰ」と2年次の「音楽Ⅱ」の授業において、音楽教育における実践的な取り組みとして、「子どもたちとともに」という行事を実施している。これは、2013年度から始まり、コロナ禍における開催中止を除き、毎年開催されている。近隣の保育園や幼稚園の子どもたちを対象に、学生たちが授業で学んだ内容を音楽劇や身体表現、合奏等で発表する成果発表会となっている。

本稿では、2024年度「子どもたちとともに」の概要、及び、「音楽Ⅰ」におけるパネルシアター「はらぺこあおむし」と音楽劇「ぐりとぐらとぐる」の質問紙調査結果について報告する。

## II 2024年度「子どもたちとともに」概要

2024年度「子どもたちとともに」は、2025年1月30日10:00-11:00に本学ホールで開催された。近隣の保育園から、3歳から5歳の169名の園児と27名の先生方をお迎えし、本学学生の1年生と2年生が多様な演目を披露した。プログラムは以下の通りである。

手遊び 「できるかな? ～あたまからつまさきまで～」

和楽器合奏 「ルージュの伝言」

手遊び 「キャベツの中から」

「さかながはねて」

和楽器合奏 「アンダーザシー」

「もりのおく」

手遊び 「1と1を合わせると」

エプロンシアター 「ヘンゼルとグレーテル」

パネルシアター 「はらぺこあおむし」

音楽劇 「ぐりとぐらとぐる」

ダンス 「ジャンボリーミッキー」

## III 「音楽Ⅰ」の質問紙調査結果

2024年度「子どもたちとともに」の実施後、「音楽Ⅰ」を履修する1年次の学生に質問紙調査を行った。「音楽Ⅰ」での演目は、パネルシアター「はらぺこあおむし」と、音楽劇「ぐりとぐらとぐる」である。履修者51名中、31名の回答を得た。調査結果を以下の表1から表6に記す。なお、調査結果の公表については個人情報保護のため本稿の目的以外で使用せず、調査結果の確認は本研究者のみとし、個人情報は公表しないことを伝えて協力を得た。

表1 「子どもたちとともに」に参加して良かったと思うか

とても良かった	17名
良かった	12名
どちらともいえない	1名
あまり良くなかった	1名
良くなかった	0名

表2 発表内容について、どのように感じたか

とても良かった	20名
良かった	11名
どちらともいえない	0名
あまり良くなかった	0名
良くなかった	0名

表3 活動を行なって、大変だったことは何か（複数回答）

演技や歌の練習	22名
道具や衣装の準備	15名
協力すること	13名
時間の調整	12名
大変だと思うことはなかった	0名

表4 活動を行なって、良かったと思うことは何か（複数回答）

子どもたちの笑顔や反応	29名
みんなと協力できた	17名
チームワークの向上	13名
自分の成長を感じた	10名
本番になると本気になった（自由記述）	1名

表5 活動を通して学んだことや成長したことは何か（複数回答）

音楽表現を通じて、子どもたちに楽しさを伝えることが出来た	24名
子どもたちとのコミュニケーション方法を学んだ	17名
役割分担やクラスみんなと協力する重要性を学んだ	13名
練習やりハーサルの準備が難しかった	12名
みんなの意見を取り入れながらより良い発表を目指すことが出来た	8名
特に成長を感じなかった	1名
学生同士で交流ができた（自由記述）	1名

表6 今回の発表に関して、改善すべきだと思う点は何か（複数回答）

準備期間が足りなかった	14名
リハーサルの時間が足りなかった	13名
当日の進行がスムーズではなかった	6名
園児たちとの交流方法が工夫不足だった	4名
特に改善すべき点はなかった	10名
先生との連携（自由記述）	1名

#### IV まとめ

2024年度「子どもたちとともに」は、学生たちが音楽表現を通して子どもたちと交流する貴重な機会となった。園児たちは元気いっぱいに、大きな声で積極的に参加をし、学生の発表に対して明るい反応や拍手をしてくれ、会場全体が活気にあふれていた。これにより、学生たちはやりがいや達成感を感じ良い経験を積むことができた。また調査結果からも、多くの学生がこの経験を通じて、チームワークや自己成長を実感し、教育現場での実践力を養う貴重な機会となったことが伺えた。一方で、準備期間やりハーサル不足が課題として挙げられ、来年度以降の改善点となる。今後も引き続き「子どもたちとともに」の意義を大切に、来年度以降もより一層充実した行事となるよう取り組んでいきたい。



# 資 料

子ども教育実践研究 編集要項  
子ども教育実践研究 執筆・投稿要領  
子育て事業における研究等に関する行動規範

# 子ども教育実践総合センター紀要編集要項

子ども教育実践総合センターが紀要（以下、「紀要」という。）の編纂にあたることとし、以下の要項に定めるところによるものとする。

## 1. 名称

有明教育芸術短期大学 子ども教育実践総合センター紀要

## 2. 目的

本紀要は、子ども教育学科の教育実習・保育実習に関する教育及び地域貢献・社会貢献に資することを目的とする。

## 3. 投稿資格

- (1) 本学の教職員（非常勤講師を含む）。
- (2) その他、編集委員会で認められた者。

## 4. 掲載区分

本紀要の掲載区分は、「研究論文」、「研究ノート」、「実践報告」、「その他」とする。各論文の執筆は、子ども教育実践総合センター執筆・投稿要領の様式に従って原稿を作成すること。

## 5. 編集委員会

- (1) 編集委員会はセンター所員5名で構成する。
- (2) 本委員会に委員長をおき、センター長をもってあてる。

## 6. 投稿原稿審査

- (1) 委員長は投稿論文審査のための査読者を委嘱する。
- (2) 査読者は所定の期間内に査読結果を編集委員会に報告し、論文の採否は編集委員会が決定する。

## 7. 著作権

- (1) 委員会が編集発行する紀要の編集著作権は、子ども教育実践総合センターに帰属する。
- (2) 紀要に掲載された個々の著作物の著作権は、当該著作物の著作者に帰属する。
- (3) 紀要に掲載された個々の著作物について、著作権侵害、名誉棄損、その他の紛争が生じた場合は、当該著作物の著作者の責任において処理する。

## 8. 電子化について

投稿者が電子化による公開を許諾している論文に限り、委員会が適正と認めたネットワーク上のウェブサイト、電子メディア等において公開できるものとする。

## 有明教育芸術短期大学 子ども教育実践研究執筆・投稿要領

有明教育芸術短期大学子ども教育実践研究紀要の執筆・投稿に関する要領については、以下の通りとする。

1. 論文は、執筆者自身による未発表のものとし、学会誌、他の研究紀要などへ投稿した原稿（審査中のものを含む）は認めない。
2. 筆頭執筆者は1人1編とする。ただし、共著論文の第2執筆者以降の場合にはこの限りではない。
3. 共著論文は、分担執筆者を明記することを原則とする。
4. 論文の区分は、「研究論文」「研究ノート」、「実践報告」「その他」とする。
5. 受理された論文の大幅な修正は認めない。
6. 論文の構成は次のとおりとする。
  - (1) 表題（和文）
  - (2) 著者名（和文又は英文）
  - (3) 要約（和文又は英文）
  - (4) 本文（和文又は英文）
    - ①序論 ②研究目的 ③方法 ④結果 ⑤考察 ⑥結論
  - (5) 脚注・参考文献・引用文献
7. 原稿の様式
  - (1) 論文は、紀要編集委員会が定める書式（B5用紙 36行×45字、横書き）にしたがって、原則としてワードプロセッサによって作成する。
  - (2) 論文の長さは、和文14,000字以内とし、タイトル、図、表、写真もこれに含める。その範囲を超える場合には執筆者の実費負担とする。
8. 写真、図像等の掲載
  - (1) 論文に写真を掲載する場合は、あらかじめ被写体に掲載の許可を得ることとし、著作者においても同様とする。
  - (2) 刊行物に掲載されている写真や図像等を引用する場合は、あらかじめ著作権者に掲載の許諾を書面で得ることとし、その出典を明記する。
9. 原稿の提出  
執筆を認められた者は、執筆・投稿要領に基づいて作成した印字原稿2部および記憶媒体を期限内に本センター長に提出するものとする。なお前者を正とし、後者を副とする。
10. 論文校正、印刷  
査読後の校正は執筆者の責任において行い、印刷は編集委員会に一任するものとする。

# 子育て支援事業における研究等に関する行動規範

有明教育芸術短期大学 子ども教育実践総合センター（以下、センターという）は、センターが実施する子育て支援事業における研究等に関する行動規範を次のとおりとする。

## I. 研究者の行動規範

研究者は、センターが運営する子育て支援事業に研究・調査を依頼することができる。

### 1. 研究者の定義

研究者とは、有明教育芸術短期大学の教員（以下、教員という）と、センターが認めた学外の教員または関係者をいう。また、教員の指導のもとにセンターで研究を行う本学学生を含む。

### 2. 守秘義務

研究者には守秘義務があり、研究・調査において知りえた情報を他に漏らしてはならない。なお、研究・調査が終了した後も同様とする。

### 3. 研究・調査の実施に関する留意点

#### (1) 子育て支援参加者に対する留意点

##### ①研究に関する説明

研究を行うにあたり、子育て支援参加者（以下、参加者という）に対し、研究の目的、方法、個人情報への配慮、資料の取り扱い等について説明し、同意を得る。

##### ②情報の開示

参加者が研究の状況、調査資料等の開示を求めた場合、開示する。

#### (2) 資料の取り扱い

①調査で得た資料（質問紙、映像、メモ等）は、研究の目的以外の目的に使用しない。

②映像資料（写真、ビデオ）を発表する場合、事前に該当する映像について参加者に確認し、許可を得るものとする。

### 4. 研究・調査の依頼と手順

研究・調査の依頼とその手順は別に定める。

## II. 所員の行動規範

### 1. 守秘義務

子ども教育実践総合センター所員（以下、所員という）には守秘義務があり、研究者および参加者について知り得た情報を他に漏らしてはならない。なお、所員を辞した後も同様とする。

### 2. 参加者への説明

所員は、研究・調査実施について事前に参加者に説明し、研究・調査について理解が得られるよう配慮する。

### 3. 研究者から提出された資料等の取扱い

- (1) 提出された資料等は、個人情報であるため開示しない。
- (2) 提出された資料等は、研究・調査等の終了後1年間保管する。
- (3) 保管期限が過ぎた資料等は処分する。

### 4. 研究・調査の受理

研究・調査の受理と実施に関する手順は別に定める。

## Ⅲ. 規範の改変等

### 1. 規範の改変

この規範の改編は子ども教育実践総合センター会議によって行い、教育研究運営会議の承認を得るものとする。

附則

この規範は平成21年4月1日より施行される。

附則

この規範は平成23年10月1日より施行される。

## 研究・調査の依頼と手順

研究・調査の依頼と実施手順	研究・調査の依頼へのセンターの対応
<p><b>○依頼書の提出</b> 研究者はセンター指定の「子ども教育実践総合センター 子育て支援事業における研究・調査の等依頼書（以下、依頼書）」に必要事項を記入し、センターに提出する。 ※学生が研究・調査を実施する場合、指導教員が依頼書を提出する。</p> <p><b>○調査の実施</b> 研究・調査の開始時に、子育て支援事業参加者（以下、参加者）に研究・調査の目的、方法、資料の取扱い等について説明し、同意を得る。 ※調査に関わる準備および資料の配布や撮影等は研究者自身が行う。</p>	<p><b>○依頼書の審議</b> センターは、提出された「子ども教育実践総合センター 子育て支援事業における研究・調査の等依頼書（以下、依頼書）」をセンター会議において審議する。 ※依頼書の記載内容に不明な点があった場合、研究者に確認することがある。</p> <p><b>○受理と通知</b> 依頼書受理後、研究者に通知する。  ※研究・調査が長期に及び場合、子育て支援事業参加者（以下、参加者）への研究・調査に関する説明文の提出を求めることがある。 ※依頼内容が観察や建学の場合、その人数を制限する場合がある。</p>
研究・調査の報告手順	研究・調査報告へのセンターの対応
<p><b>○報告書の提出</b> 研究者は研究・調査の終了後、「子ども教育実践総合センター事業における研究報告書（以下、報告書）」に必要事項を記入し、センターに提出する。 ※参加者に書面をもって報告する。書式は自由とする。</p>	<p><b>○報告書の確認</b> センターは、提出された「子ども教育実践総合センター事業における研究報告書（以下、報告書）」をセンター会議において確認する。</p>

## ○令和6年度子ども教育実践総合センター構成員

《センター長》

山田麻美子

《センター所員》

新庄 恵子

信太 朋子

菊地 大介

伊藤菜々子

## ○編集後記

有明教育芸術短期大学子ども教育実践総合センター『子ども教育実践研究』第8巻の発行を迎えることができました。発刊にあたりご協力いただきました先生方には厚くお礼申し上げます。第8巻においては合わせて5本の研究論文、研究ノート、実践報告及びその他の投稿がございました。質の高い充実した内容の研究紀要が出来上がったと感謝しております。この場をお借りしてお礼申し上げます。

今年度は学生の学び及び地域貢献行事の一環として、12月に近隣のマンションクリスマスコンサートへの参加、1月に実践教育研究会の開催、1月末には「子どもたちとともに」の開催などの行事を行うことが出来ました。ご協力頂きました保育・教育現場の先生方、園児の皆さま、地域の皆さま方に心より感謝申し上げます。

子ども教育実践総合センターは今後も引き続き地域社会の課題にともに向き合い、学生ともども出来る限りの活動を実践してまいりたいと考える所存でございます。今後ともご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

有明教育芸術短期大学 子ども教育実践総合センター長  
山田麻美子

発行者 有明教育芸術短期大学子ども教育実践総合センター

令和7年3月31日 発行